

---

# 異世界少年

バード

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界少年

### 【Nコード】

N2595W

### 【作者名】

バード

### 【あらすじ】

とてつもないチート能力もった主人公が圧倒的に無双するはなしです。

NOシリアス、決して面白くありませんが暇つぶしにさえなれば幸いです。

なお、投稿間隔は保険として3週間以内となっています。（11月29日現在）

## テンプレ的な白い空間（前書き）

投稿はとてつもないほど不定期で文章少ないです…そこんとこ了承の上でお読み願います。

## テンプレ的な白い空間

「…ここどこ？」

気がついたら白い空間の中

これってテンプレ的な？

神出て来たりしませんよね？

「それが出てくるんだもんねー」

…は？

「は？とかいくら神でも傷つきますよ？」

おれの目の前にいるのは小4ぐらいの背丈の少年。

いや、こんなの神だったら驚くдар。

「そんなのはないよ。んで取りあえず本題に入るよ。これからきみには異世界にいつてもらう。」

「え？何故元の世界じゃないんだ？」

「自分が死んだこと覚えてないの？」

ああ、そうだ思い出した。通り魔にあつたんだ。んで心臓をサクリツと殺ら…れ…た？

「そう、一度死んだら元の世界に戻るには

記憶や姿など全て捨てて赤ん坊から転生するしかない。まず普通の人なら自動でそのままこの手段で転生されることになる」

「なら神に会ってる俺は特別か」

「うん。ぼくの手違いで死んだからね」

サラリと言ってくれるじゃねーか

「言わなくてもいっしよだからね。まあそれで異世界へ転生させるということ」

「なる程」

「んでお約束の能力？特典」

「まってました！」

「やっぱり叫ばずにはいられない。」

「うん。んで特典から先言つよ。ひとつめぼくといつでも話せるようになる。ゴッドチャットと念じればいつでも出るよ」

「そのままだな。まずいつでも出れるほど神は暇なのか？」

「うっさい。特典1つ減らすぞ」

「すみません」

「とりあえず平謝り。だいじなものだったなら難儀だし。」

「よろしい。2つめ、MP、ギルドと一体化」

「ギルドと？」

「つまりギルドレベル上げればMPも上がるということになるほどなるほど」

「んで能力1つだが強い」

「それはなんだ？」

「魔法全部つかえるとか？」

「そんな願望は次の言葉で叶えられた。」

「思ったことが実現または思った事をすることができる  
なんじゃこのチートぶりは！！！」

「ただし、チートすぎなぶんリスク？デメリットがある」

「そりゃそうだな」

「どんなだ？」

「1つ、MPを実現したことで同じぐらい消費する  
そりゃしかたがない」

「2つ、出来事は実現出来ない」

「当たり前だな。できたら世界崩壊される。」

「3つ、人を一発でたおす魔法とか、金を作ったりすることはできない」

「これも元々する気無い」

「んで？」

「以上！異世界逝ってらっしゃーい！！」

なんか何気なく字が違う!と、思ったら、  
パカッ

床が開いた。

え？

「うそーーーーーん!!!!」

まあ、そのまま落ちていった訳ですよ。

## テンプレ的な白い空間（後書き）

つまんないこと前提で読んでやってくださいw

## チート練習1

「まずは落下をとめよう。後はそれからだ」

という事で俺は、飛べる魔法を使ってみることにした。

「やっぱ飛ぶなら風だな」

とりあえず強い上昇気流をだして浮かぶことにした。

シユン、ボオオオオオオッ！

一瞬体から何かが抜ける感じがすると同時に下から物凄い風が吹いてきた。

その風は、俺の落下を止め、ゆっくりと俺をおろしていく。

「。〒# >\$¢^±# ！？」

一方その俺はかぜのせいで喋れなかった。

(次は加減をしよう…)

そう心にちかう秀一であつた…

それから3分くらいして俺は草原に着陸した。

「よし、このチート技練習しよう」

そういつて始めようとした時間き覚えのある声が頭に響いた。

…あのチビ神だ。

「チビは酷いよ！チビは！！」

本当のことだもん。んで、用件は？

「本当のことって… まあいい。んで用件ね。言えはこの世界での注意点」

ああ、そついや聞いてなかったな。んでどんなだ？

「1つ、技の名前ぐらいは使うとき言つてね。この世界で無詠称するとあやしまれて最悪捕まるから。捕まっただとしてもぬけるだろうけどきをつけて」

面倒事きらいだしきを付けよう。

「2つ。一気にレベル上げないで。他の人の目につくから。そして



最後、後ろ敵いるよ？」

「なっ！」とうしろむいたらでっかいキノコがいることにきずくまでかからなかった。…何時の間にか通信きれてる。あの臆病者め。まあ、まずは…

「こっちを殺りますか！」

キノコVS秀一の戦いはじまった。

## チート練習1（後書き）

DSIでうつてるひとつてほかいるかな？いたら一言コメントくだ  
さい！

誤字修正しました

## チート練習2（実戦）（前書き）

即、決着します。

## チート練習2（実戦）

このキノコの化け物はハラブというらしい。何故分かったかは、少し、「名前なになー」とか思ったら勝手に出てきた。まあ便利だしいいけど。

とりあえず前のキノコをどうしようか。

一応植物だし焼いてみるか。

「ファイヤー！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオ！！

あ、強くなりすぎた。

「グギシャー！！！！」

ハラブは一瞬にして消し炭になった。

ゴミのようだ！

そうおもっていたら急に炭がきえた。

そして消えたとうとうに黄色い粉がすこしはいった袋が落ちた。

「モンスターを倒したらドロップアイテムが出るのか。剥ぎ取らないでいいいいいな」

とりあえずその袋のなかの粉を舐めてみる。なにかしらべるために。

：

：

結果、痺れ粉でした

というかまずさわった時から痺れてたし薄々きがついてたけど。

取りあえずこれはもっておく。鍊金すれば武器になるかもしれないし、無理でも近くの町で売れるだろう。

というかまず町いかなと始まらないし行くか！

## チート練習2（実戦）（後書き）

歩いてる最中の話は2〜3話になると思います。

## 錬金しよう！

さっきいた場所から5km位歩いた所で日が暮れた。

ここまで来るのに20体程モンスターが来たが、残らず燃やした。

なかにはノッポとかいう木の化け物もいたがぶっぱなした。ドロップアイテムは蜜や木の枝とか、ちなみに全て頂いた。木の枝なんか見かけの割に耐久力がつよいもん。

そんなこんな合って今は夜。テントを作り出して張って、光の魔法で周りを照らし障壁を張った。

「完全防御一丁上がり」

これでこちらのモンスターは襲ってこれないだろう。

さて、いまからしたいことがある。それは、錬金術だ。

材料も集まったしやってみようと思う。

「まずは剣だな」

秀一はまだ武器をもっていないので剣を作ることにした。

「材料は木の枝と痺れ粉でいいかな？」

そういつて秀一は痺れ粉と木の枝に触れた。すると、

バチッ！バチバチバチ！

火花がちり同時に一本の剣が出てきた。そして、

>電木刀が出来ました<

どこからともなくそんなメッセージが出てきた。というか「誰だよ

！」って突っ込みたい。

そこはおいといて、この木刀、たしかにすごい。なんと刀に触れると痺れるのだ。意外に凄いとおもう。

今日はこれ位にして寝た。

錬金しよう！（後書き）

W  
アップして見ました。

## 乱入試合（前書き）

また、一瞬。そして、短いです。



# 乱入試合

朝になり、すぐに気づいた事。

「食いもんがねええええええええええ！！」

でもドロップアイテムの蜜があつたので喰う。

「おえ〜〜〜〜〜」

まず過ぎた。

でも案外腹一杯になるしいつか。

それから10分後:

1 kmほど走っているが……ちよいとやりすぎたか。

前には粉々になったモンスター（ゴミ）と、横には啞然とした少年がいる。

なぜこうなったかは見当がつくとおもうが30秒ほどさかのぼる。

俺が疾走していたときの……

ダダダダダダダダダダダダダッ！！

俺は忍者よりも速く走っていた。

「あゝ暇だゝなんかねえかな」

そんなことをいつていると人影が見えたので、話しかけようとしてその人の状況を知った。

そいつはボロボロで所々に切り傷があり、それに付け加えるモンスターにかこまれている所だった。

話を聞きたかったなので面倒だが助けることにした。

…それから言わずともわかるまい。

まあとりあえず……

「おい、きこえてるかー？」

少年から話を聞く事にした。

## この世界の事（前書き）

仲間が増えます。

## この世界の事

あれから5分：

呼びかけている内に少年が怯え始めた。

…何故に？

10分：

イラついてきた。

まだ口を開けない。

20分：

「おい」

「……」

相変わらず無口な少年。

30分、40分、50分、

「話を聞かせて貰えないかな？」

「……」

プチッ

「話を聞かせろつつつてんだろ糞ガキがあああああ……！」  
そう叫ぶと同時に木刀をふりかぶる。

「わあっ！分かりました！話しますから武器を下ろして……！」

「最初からそうすればいいじゃん」

俺は武器を下ろして質問を始めた。

∴  
∴  
∴  
∴

少年の話に寄ると、この先の国は王がいる王国でイスグラルという国で、とても治安が良く犯罪が起こったことがないらしい。そして他の国とも戦争が起こった事もないらしい。

∴ まさに平和な国だな。

んで自分は奴隷商人に売られる所でモンスターに見つかりおとりとして馬車から放りだされたのだと。

それともう先に俺が異世界からきたことは話してある。最初はそれこそ信じて貰えなかったがそのらの実を拾って錬金の応用で一瞬で回復薬作ってやつたり、酸素だけを圧縮して酸素玉を作ったりして人外過ぎる技をみしたら信じて貰えた。まあ信じて貰えないならあの子ビ神をだすまでだが。

んでいまだが∴

少年に追っかけまわされてる状態。

少年曰わく帰ってもすむところがなくてモンスターを一瞬で叩き潰した俺に仲間にして貰いたいんだと。

んで今に至る。

んでこの少年が怖いのよ。

ビツシャアアアン！！！！

雷の魔法をうちまくってくるのよ。しかも威力が強くてさっき背中にかすったがかすったところから徐々に焦げ始めたんだ。

そこは水で止めたけどまともに当たったら

ひとたまりもない。とりあえずここは折れてやって止めるか。

「分かった！分かつてビツシャアアアアン！から止めてビツシヤアアアン！」

「えっ本当ですか！？ありがとうございます！」

よう聞き取れたな。

「僕はアルム、アルム」アランといいます。宜しくお願いします！」

「こっちは尾崎秀一、秀一で、宜しく」

こうしてすこしづぎみな少年が仲間に入った。

## 11の世界の事（後書き）

つぎで王国に着きます。

## 王国イーステラル

あれから10分ぐらいして2人はイーステラルに着いた。

アラン曰わくこの国は人口が2000万人ほどで商業がさかんだという。またギルドもあり、冒険者も多いそうだ。

「さて、まずはギルドに行きますか！」

「そうですねお金を稼ぐにはそれが一番ですし。なにより秀一は冒険者じゃないですしね」

「?ということはアランは冒険者？」

「はい、一応ですからギルドのことも分かりますが先に説明しましょうか？」

「お願いします」

：

：

：

：

：

アランによるとギルドこの世界にいくつもあり、ランク制になっていGからF、E、C、B、A、AA、AAA、S、SS、SSSになっ  
ていて、クエストをこなすとあがつていくんだと。ただしクエストでの責任は全て自己責任で、クエストに失敗した場合は報酬金の1割を払うのが原則なんだって。

クエストの種類は主にモンスターを討伐する討伐クエスト、指定された物を取ってくる採取クエスト、護衛対象を護衛する護衛クエストの3種類で3つまでなら一度に受けることができ、自分がつくったり取ったりしたアイテムやモンスターがおとしたりしたアイテムは買い取ってくれんだと。

まさに万能だなギルド。

「それではいきましょーうか」



「ああ、いこうか」

そして秀一はアランの手を掴み…

「ワープ!」

秀一は話をしているうちに千里眼を使いギルドの場所を把握していたのだ。

「え?」

シユン

秀一達は一瞬でてそのばから消え、ギルドの前に姿を現した。

「よし、OK、行くか!」

「えええ!なんでギルドの前に!?!」

「おーいいくぞー」

「まあいつか、どうせ人外なのはわかってますし」

∴

∴

∴

ギルドのなかは見かけの割にひろいところだった。

「アランゝ登録はどこですか?」

「その2番の所です。行ってらっしゃーい!といたいとこです  
が登録にはお金がかかるので…なにか売れるものはありますか?」

「うーん、んじゃあ回復薬を売ってくるよ」

「わかりました。売るなら3番ですよ」

「分かった。いってくる」

秀一は3番のところに歩いていった。

「すみませーん、これ作ったものですが売れますか?」

そついつて秀一がだしたのは4つの球体。

「はいはい、この薬ですね。何薬ですか?」

「回復薬です」

「わかりました。ではすみませんが試し飲みとして一つ頂きますが  
よろしいですか?」

「わかりましたいいですよ」

「はい、では少々おまちください」

∴

∴

∴

1 分後∴

「お待たせしました。3 つで150 イルになりますが宜しいですか？」

さきのアランにきいておいたんだが、銅貨一枚10 イルで、銀貨が一枚100 イル、金貨

が一枚1000 イルで、白銅貨一枚10000 イルで宿屋が一泊50 リルのところからみると1 リル〃100 円の計算になる。

だから150 リルは1500 ∴ 0 円の∴ 計算に？

「そんなに効力が強かつたのか！？」

「はい、大怪我をしていた人に食べさせて見れば傷があつという間に塞がりました！」

「そうか∴ 分かった！これでいい」

「はい、では150 リルになります。ご利用有り難う御座いました！」

俺は150 リルを持ちアランのところにいった。

「何リルでうれましたか？」

「∴ 3 こで150 リル。大怪我の人が飲んで一瞬で治ったそうだ」

「ハア∴ 本当にあなたは人ですか？」

「人だよ！！」

「そうですか∴ 取りあえず、

今日はおそいですし宿をとりましたよう」

「そうだな」

とても呆れられた。何故だ？

∴

∴

：

5分程歩いて「暮連」と看板にかかれた宿についた。

「アラン、宿って長期滞在とかできる？」

「できますがどうしてですか？」

「しばらくはこの国にいるつもりだし」

「わかりました」

そうして俺達は宿に入っていった。

「おや、いらつしゃい。宿泊かい？それとも食事だけかい？」

「宿泊で、あのう長期滞在できますか？」

「できるよ。それなら1日2食付きで一泊30リルだよ」

「じゃあまずは4日で120リルで」

秀一は女将さんに120リルを渡した。

「毎度！部屋はこのさきの103号室だよこれはカギだよ。んで食事は2回までなら言ってくれば作るよ。ただし3かいいいじょう食べる時はお金がいるからね」

「分かりました。では早速夕食二人前お願いしまゝす」

「あいよ！」

まずは夕食を食べることにした。

## 王国イースゲラル（後書き）

次はクエスト行けるかな？

## 錬金しよう! 2 (前書き)

錬金を沢山します。

## 錬金しよう！2

夕食を食べた後俺たちは部屋にはいった。

部屋は個室だが広く、ベッドが2つおいてあってとてもゆったりと出来る造りになっていた。

「アラン、いまから錬金をするけどみるか？」

「錬金？」

「そう、物と物を組み合わせて武器とか道具を作るんだ」

「鍛冶と似たような物ですか？」

「うーん、まあそんな感じ。それを俺は手しか使わずにやる」

「鍛冶を手だけですか…すこし見してください」

「んじゃ実験として空気でやってみようか」

「空気はできないでしょう？」

「それが出来るのさっ！えいっ！」

秀一は何も無い所にてをだして魔力を出した。するとてを出した所に白い翼が浮かんでいた。

「えええっ！ほんとにできちゃってる！」

「んでこの翼はライトウイングといってすこしの間空を飛べる物だ」

「へえー少し使わせて貰っていいですか？」

「いいよ。んじゃ背中に翼を着けて」

「こうですか？」

アランの背中に翼がつけられる。

「いいよ！じゃあ背中に力を入れてジャンプして！」

「こうですかっ！」

アランがジャンプすると同時に翼が光り動き出す。

「わ！わっ！飛んでる！本当に飛んでる…！」

「おお、一発で成功させたかうまいねえ。でももうそろそろ降りた

方がいいよ?」

「なんでですか」

「だから…もうおそかったか」

「なにが…ワッ!」

アランが頭から落ちた。

「う」

「これは試作品、短時間で効果が切れて消えるんだ」

「先に言ってくださいよ」っててて」

「ごめんごめん余りにもはしゃいでいたから」

「~~~~っ!!」

「とりあえず続きやるぞー」

「次は何を作るんですか?」

頭にでっかいタンコブをこしらえたアランがいった。

「次?次はアランの武器」

「いいんですか?」

「いいのいいの、んでまずここからすきなものを選んで」

そう言って秀一は鉄くずと木の棒をだした。

「んじゃ鉄で」

「わかった、次はここから選んで」

そういつてだしたのは、麻痺袋、水袋、火炎袋、色の付いた石を5

つほどだした。

「このいしは魔石ですね」

「魔石?」

「はい、中に各属性の魔力が込められています」

「なるほど、んでどれにする?」

「この電気の魔力が込められた黄色い魔石にします」

「よし、んじゃそれ貸して」

「?」

アランは不思議に思いながら魔石を返す。

「んじゃいつくよー」

バチバチバチバチ！

火花が散りそれから一本の剣が出てきた。

> 電仁刀が出来ました<

というメッセージと一緒に。

そしてこの刀のステータスをみてみた。

電仁刀

威力150

切れ味100

属性 電気

魔法 1・エレクトリック 2・エレキボール

魔法が込められているみたいだ…

とりあえずアランに聞こう。

「アランー剣ができたんだが…武器に魔法が込められているということはよくあるのか？」

「ありますよ。魔石を使えば100%付きますよ、何という技ですか？」

「エレクトリックとエレキボールというんだが…」

「聞いた事ありませんね…使って見ますそう言っアランは窓を開ける。そして剣をななめ上に上げて「エレクトリック！」と叫ぶ。すると剣が光って電気をまとい始めた。

そして3分位してようやく帯電が消えた。

続いて「エレキボール」と唱える。すると剣先から握り拳の一回り大きい位のサイズの電気の球が発射された。

結果 大成功

ほかには鉄と火炎袋で火炎剣も作った。火炎剣を装備し、電木剣はうることに。

他にはムミの実と蜜で携帯食を作ったり（味はない。無味だもん）酸素玉を10こつくったり…

今日作った物 箇条書き



携帯食×3

ライトウイング（試作品）×20

酸素玉×10

火炎剣×1

電仁刀×1

水流刀×1

HP回復薬×10

MP回復薬×5

こんなもんですな。

これで残りの材料は…

木の枝×3

麻痺袋×2

火炎袋×1

魔石×4

空気？酸素×（これからは省略）

石ころ×5

こんぐらいですな

「さて材料ねーしもう寝るか」

「いいですけど…研石忘れてますよ？」

「ああ、そうだそうだ忘れてた。作ってか

ら寝よう」

それから研ぎ石を作ってから俺はある実験を始めた。

「なにしてるんですか？」

「切れ味が0になったらどうなるかの実験」

「へーえ、でもどこを斬るんですか？」

「透明な障壁で作ったかかしに色を塗ったもの」

障壁をかかしの形にしてそこにペインの実を付けた物だ。

「よし、それじゃあ行ってみよう！」

ガンッゴンッギンッゴンッギンッガンッ

「90…80…70…60…」

切れ味が障壁を斬るたびにへっ  
ていく。  
「30...20...10...0!」

## 錬金しよう！2（後書き）

ポキリ…

切れ味が0になると剣が折れた。

「うわーこりや気を付けなきゃだめだね」

「研石がなきゃ武器が壊れる所だったでしょう？」

「ああ、そうだな。でももうそろそろ寝ないか？」

「そうですね、寝ますか」

そうして2人は寝た。

次こそギルドです！

いざ、クエストへ！（前書き）

この小説が短い訳は活動報告にあります。  
正直言ってつらいです。

## いざ、クエストへ！

「うし！登録終了！」

「お疲れ様です、これからクエスト行きますか？」

「行こうか、金が無いし」

さて…ここまでの経緯を順番に言おう。

1、朝、（昼）

二人揃って寝坊！！急いでワープしてギルドへ。

ちなみに朝ご飯は携帯食料ですませた。すぐに食べれて腹も少しは膨れるしね。

2、ギルド到着、中に入って手続きを始める。

んで手続きしててわかった事、この国の言語が日本語とそっくりで横文字や漢字もあったのでとても助かった。もし違ったら字を読んでもらうという羞恥プレイになる所だった。

3、ギルドのルールを教えられそうになった。

あのままいつてたら2時間は軽く話してそうだ。あらかじめアランにきいていてよかったと本当に思う。

4、水晶が出てきて血を要求された。

んで腕を少しはりで刺して血を垂らしたら

水晶が光り始めた。そして水晶の中にBの文字が浮かび上がってきた。聞いてみるとこれは最初のランクを調べるもので調べたい人の血を垂らすとそのひとのランクが分かるんだと。

そうしてギルドのとうろくは終わり。らくでしたー！

んで今だが…

アランと一緒にクエストを選んでいるところで、ちなみにアランのランクはCなんだと。近いランクで良かった。

「秀一、これどうですか？」

そういつてアランが指差していたのは

A級討伐クエスト

討伐対象：アクアドラゴン

報酬：銀貨50枚

報酬も申し分ないしこれでいいか。

「うん、まあいいんじゃない？」

「ではこれにしましょう！」

そうして二人はクエスト受注のため4番の窓口に向かった。

「えーと、このクエストを受注したいのですが？」

「はい、アクアドラゴン討伐ですね。ではこの腕輪をお付けください」

「これは？」

「その腕輪は真実の腕輪といいまして、クエスト中なにを討伐したかを自動で記録してくれる優れ物です」

まあモンスター倒したらアイテムになるし複製される可能性があるからな。

「分かった」

「はい、アクアドラゴンはルータル草原にいます。ご武運をお祈ります」

そうして窓口の人に営業スマイルで送られたあと俺達はすぐには草原にいかず武器を揃えに武器屋に来た。

「らっしやい！ここはお前らみたいなチビなお子様がくるとこじゃないぜ？とつと家どころんとしとkメキイイイ！、ギヤヤヤアアアアアアアアアア！」

そう、俺、尾崎秀一はチビとかお子様とかいわれるのはとてもタブーなのだ。前の世界でも「やーいチビ」とかいう奴殴って病院送りにしたもんなあ……

「おら！このジジイ！！今言った事を撤回しろ！！」

「ひっ、ひいひい！わ、分かりました！！撤回しますのでど、どっ、どうか、こ、こ、殺さないで！！」

めっちゃ怯えてる。まあ許したるか。

「分かりやいいんだ」

「す、すみませんでした!!」

「ただし次言ったらそのときは…分かっているよな?」

カクカクカクカク

店員はロボットののように凄い勢いで首を縦にふる。余程怖かったんだろう、しっこびってやがる。

「よろしい。さて、アラン、武器なんか買おうぜ」

「そ…そうですね」

あれ?なんでアランが怯えてるのかな?

「あの…」

「なんだ?」

「秀一って元の世界でもこんな性格だったんですか?」

アランが微妙にふるえながらきいてくる。

「ん?まったくおなじ。いつてきた奴は3秒でみんな気絶させた」

「……………」

さらに怯えられた。酷い…

---

きを取り直して。武器をかうことにした。

俺は買う必要はないけどデザインの参考に。(鍊金ですぐ作れるしね)

後は……

「ここに金属の余りとかくず鉄はないか?」

「ひゃっ、あ、あります。…が何に使うんですか?」

かなりびくつちゃってるわ。だめだ、こいつ。

「それは内緒、金がかかってもいいから全部くれ!」

「分かった、じゃあ少し買っててくれ」

元の態度に戻った。流石は武器屋の店員。

ドッスン!!

それから3分ぐらいしてカウンターに3つの木箱が積み上げられた。

「こつから銅、鉄、ミスリルとなるが？」

「よし、いくらだ？」

「この量だと銀貨5枚ぐらいが相場でしょうな」

「分かったそれでいい。後これからくず鉄がでたらいつてくれ、種類や量によつては高値で買い取るからな」

「分かった！まいど！！」

「秀一、これかっってください！」

そいつって出してきたのは一本の長剣。

「すまん、これも買う」

「おう、ああ、これなら一本銀貨15枚だがさっきの無礼もあるし一本12枚にまけてやろう」

「よし、それでかおう」

「毎度！！」



いざ、クエストへ！（後書き）

「おいアラン、次、次！」

「あつ、はい」

少しクエストいくまえに色々とよっとくか。  
クエスト出発は少し掛かります。

装飾品屋へ！（前書き）

1つ1つかくのがとてもうれしい。

HELP!!PC!

## 装飾品屋へ！

ダダダダダダ

土煙を出しながら秀一達が向かったさきは装飾屋。

ズザアアアアアアア

盛大な土煙と音を出して秀一達は止まった。

「よーっと、ここが装飾屋か？」

「っと、はいそうです。ですがなにを？お金あるんですか？」

「あるぞ。ほらよ」

ジャラン

秀一は銅貨がどっさり入った袋をアランに放り投げた。

「わっ！わわっ！これは！？」

「銅貨がそんなか1000枚程はいつてるからよ、すきないくらでもかってこい」

「1000枚！？こんなにいいんですか！？」

「余ったらくれてやるよ。その代わり買った物見せて」

この銅貨は錬金術で作った物なので秀一には実際、材料分は他の物作って売れば損失はないのだ。なのでこんな余裕をかましているのだ。

「わかりました！ではいつてきます！」

「行つてらっしゃーい」

アランは店のなかへはいつていった：

：

さて、秀一は

「よし！あれ作ってみるか！」

秀一はあるものをつくることにした。

「みられるとやばいし亜空間作って入って作る。アビス！」

ブーン！

秀逸が亜空間を想像すると秀一はそのばから消えた。

シュン

そして紫色の亜空間のなかに出現した。

「よしつやるか！」

バチィ！バチバチ！

ほんの一瞬でそれは出来上がった。

秀一の手の平にあったのはあの有名な青狸の時を止める道具

そう、タンマウォッチである。

「うし、出来たあ！早速つかってみよう」

そうして秀一は亜空間から出て元の場所に戻った

幸いそのときには人はいなかったのでみられることはなかった。

「よしつかうぞー、時よ止まれ！」

カチッ

ジュワーン

時間が止まる。

「おーっ成功成功。もとに戻そう」

カチッ

シューン

時間が進みだす。

「おーっタンマウォッチが出来た！」

：

：

：

それから10分後：

アランが戻ってきた。

大きな袋を引っさげて。

「こんなにかったのは久しぶりです！」

「そうか、品物をみして」

「はい、でもなににするんですか？」

「錬金のデザインだよこの世界のデザインってもんがあるだろ？」

「成る程、変に思われますもんね」

「そう言う事。見せて貰うよ」

…

…

装飾品は主に指輪やブレスレットになっていて、ブレスレットの場合石が皮膚に直接ついているため効力は高いがすぐに使いものにならなくなった。

指輪ははなれているのでその逆の効果だった。

「またつくってみるか。もういいよアラン」

「そうですか、ではもうそろそろいきませんか？クエスト」

「そうだないくか！」

秀一達はクエストに出発した。

今回は特に短かったですねー

もっと長くしなきゃ（汗）

只今までの登場人物？装備？モンスター（前書き）

クエスト出発までの登場人物。これまた短い。

## 只今までの登場人物？装備？モンスター

尾崎秀一

14歳？男

神のミスで死に、ほとんど強制的に異世界転生させられた何とも不幸な男。

いまはアランと行動している。

とても背が低い。なのでチビとかお子様とかはタブー

装備

火炎剣

>ステータス<

属性

火？切断

切れ味

250 / 250

スキル（特性）

火耐性アップ？火属性魔法威力微量アップ

道具

タンマウオッチ

時間外を止める、しかし30秒まで。5回程使うと壊れる。

アラン

13歳？男

本名アルム＝アラン

奴隷商人に捕まりうられに連れていかれる所でモンスターに遭遇しておとりに使われ死にそうな所を秀一に助けられ仲間になる。いまはこの生活をエンジョイしている。なかなか活発な性格で裏は魔法を連発してあばれる魔法狂。

装備

電仁刀  
でんじんとう

>ステータス<

属性

電気?切断

切れ味

300/300

スキル

スピードアップ?電気ダメージ半減?全電気威力アップ

魔法

エレクトリック?エレキボール

武器屋の店員

いつも強がり。秀一のタブーをいったため災難にあう。実は滅茶苦茶チキン(弱虫)

宿の女将さん

性格は優しくとても親切だが裏では怒りを表し調理器具で殴りまくる。とても少年が上手。

神

通称、チビ神。秀一を異世界に送った張本人。馬鹿にされると怒るがそれまでで、そんなに怒らない性格。実は下の位の神なのでそんなに世界を司っていない。また、信仰されても無い。その事でちょっと凹んでいたりする。ちなみに男。

モンスター



バラフ

きのこのモンスター。ざこいが毒をもっていて甘くみていると痛い目にあう。

ドロップアイテム

麻痺袋？毒袋？きのこの孢子？地魔石

ノツポ

木のモンスター、こちらは完全に弱く木の攻撃も全然いたくない。一応植物なので火で攻撃すると一発で燃え尽きる。

ドロップアイテム

苦甘い蜜？木の枝？木の皮？風魔石？木の葉？カイククの実？ムピ  
ーの実？ハレツの実

ハラル

火を纏った巨大なムカデ。水をかけると火が消えてきて消えると死ぬ。打撃を与えるさいは水をつけないと火傷する。通称、火虫。  
ドロップアイテム

火炎袋？火魔石？地魔石？火虫の皮

予定変更！！

…つと、クエストにいくまえに…

「ライトウイングに風魔石を錬金して…」  
バチバチバチ！

> 風帯の翼が出来ました<

「鉄と火炎袋を錬金して…と」  
バチィ！バチバチ！

> ターボブーツが出来ました<  
「最後は銅と火炎袋で！」

バチバチバチィ！！

> ブロンズボムが出来ました<

…よし！

「アランーいくぞー」

「はい」

「あとはこれとこれ付けて」

「？これは緑色のライトウイングと…靴？」

「そう。そのライトウイングは改良版。前の2000倍は軽く飛べるだろう。靴はお楽しみ、だ」

「なる程、ではいきましょう！」

「ああ！」

二人は飛び上がり、羽を動かす。

「よし！こっからだ」

「？こっから？」

「まあ見てろつて、ポチツとな」

「ポチツと……………」

ポオオオオオオオオオオオ

ターボブーツが火を吹き始め…

ドッカアアアアアン！！

ジェット噴射を始めた。  
ビュユウウウウ！！

その速さは音速を超える。

「……………！！」

「……………！！」

…そう、喋れないのである。（正確に言えば喋れるが聞こえないのだ）

1時間ぐらいして…

スピードを緩める。

「水辺が見えてきたしそろそろ降りるぞー」

「はい！」

…

「……………アクアドラゴン発見……………」

「降りてそこにドラゴンって…」

「やばすぎますね…」

そう、今二人はアクアドラゴンの前におりちゃたみたいで…

「グオオオオオオオオ！！」

雄叫びが拳がる。このままだと確実におだぶつだし目立つと騒がれたり固まられるし…まずは、

「喰らえ！ブロンズボム！」

そういつて秀一は爆弾を投げる。

ポオオオン！

あー…火力がたりなかったな…

めのまえには無傷のドラゴンがいた。

「うーん「少しのいて下さい…」ああ…」

後ろにいたのは気合いを溜めたアラン。

オーラが漂っているのはきのせいだろうか？

「エレクトリック」

剣に電気が蓄電され黄色くなる。

「電撃破！」

剣から無数電気の刃が飛ぶ！

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

刃は残らずドラゴンに当たっていたが：まだまだ無理か、ステータス見たけどHPがまだ4分の1もへってないな。！そうだ。

「アラン！ちよつと下がれ！全然弱ってない！」

「えええ！？わかりました！やつちやつてください！！」

「おお！ライトニングボルテックス！！」

ああーふらふらする。MPつかいすぎた。

そうおもっている合間に：

ビッシヤヤアアアン！！

ドラゴンの頭に雷が落ちる。

：ドラゴンの頭が焦げ始める。

「グオオオオオオオオ！！？」

ドラゴンがもがき始める。多分とまんないよー水がかからんうちはそうおもいながらドラゴンにちかずいてドラゴンの体に深い切れこみをいれ：ブロンズボムを入れて：

逃げるだけ。

「逃げるオオオオオオ！！」

ボカアアアアアアアアン！！

アクアドラゴン、爆死。ご合掌。

んでアラン、呆然。これどうにかならんかな：

結局そのあと質問攻めにあつたのは言うまでもない。

：

「よし！かえりましょう！」

「お前、よく考えろよ、普通往復最低4日掛かる所を1日で帰って見る、それこそ疑われる」

「なる程、ではどうするのですか？」

「1つは素材？アイテムの採取。あと1つが経験値を戦って上げる」

「わかりました：が今日はもうねましよう、日が暮れて来ましたし」

「そうだな、テントでも張るか」

「?どこにテントが?」

そのあと俺がなにもないところからテントを取り出してはって質問攻めにあつたのは言うまでもなくて…

**予定変更！！（後書き）**

これから定期的に錬金が入ります。次も錬金。

### 錬金しよう! 3

「よし、いまある材料はつと」

「何してるんですか？」

「材料の確認。錬金しようと思って」

「錬金ねえー、また見してくださいよ？」

「分かった分かった、いま始める」

ちなみに今ある材料

ミスリル×30

銅×3（ほとんど銅貨にしちゃった）

鉄×10

真つ直ぐな骨×20

パワーストーン×1

ディフェンスストーン×2

火魔石×4

風魔石×3

雷魔石×5

水魔石×6

巨大な水魔石×1

地魔石×3

光魔石×5

闇魔石×3

火炎袋×3

麻痺袋×2

水袋×3

氷結袋×2

石×20

大石×5

岩×1

…これほど。我ながら沢山拾ったな！。

「今回は俺の武器から！アランはちょっとまちなされ」

「はい、その代わりいいの作ってくださいよー！」

「分かった分かった」

とりあえず…

今回作るのは銃だ。ていうかこの世界にあるか？

「アラン、銃ってこの世界にある？」

「ありますが実戦に向かない物ばかりです」

なるほど、あるにはあるんだ。んじゃ、ハンドガンを少し改良したものを作ろうかな。

「んじゃ強い銃を」

「ここの最強銃の威力はノッポを2発位ですね、超せますか？」

「余裕！」

バチバチバチ！

>ドロームガンが出来ました<

できたのはもつところが緑色の拳銃。

「こんな形の銃はみたことありませんね…

すこしなにかに撃って貰えませんか？」

「すこしまて、ここの銃はどんなふうに撃つんだ？」

「うちの属性の魔力を込めてトリガーを引くだけです？」

「こっちはあらかじめ作った金属のたまを込めてトリガーを引くと

…」

パアアアアン！

テントに小さな穴が一瞬にしてできる。

「弾が出る」

「これじゃかわせない…」

「当たってみる？」

「…遠慮します」

「そつだよな、並の人なら心臓当たれば即死だしね」

「威力が違う…」



「でも、これもつと強くなるよ？まずこれ最弱だし」  
「これで最弱ですか…」

「そう、弾によって威力がちがうんだ。例えば…」

秀一は白い弾を銃に込め…トリガーを引く。

パン！

弾が打ち出される。

「これがどうしたんですk「目を閉じろ！」え！？」  
気づくのが少し遅れたアランは目を閉じれなかった。  
サーッ！

弾が破裂し、破裂したところから閃光がほと走る！

「うわああああ！？」

アランは閃光をともに食らってしまったが。

閃光が消え…

暗闇にもどつて、

「おい大丈夫かー」

「目があああー！目があああー！！！」

アランがムスカ大佐になった。

結局、アランの目が治ってから秀一は30分ほど説教をされたとい  
う…

30分後…

「よし、続けよう」

「次はなにを？」

「うーんと装飾品かな」

「ああーなるほど」

「ここでチヨイスタイムー」

「おおー」

「このなかからどれか選んで」

そういつて秀一が出したのは骨と鉄と銅とミスリル。

「んじゃミスリル」

「遠慮ないなー」

「悪かったですね（怒）」

「サーセン、ではつき」

そっいつて次に出したのは各魔石。

「んじゃ、電魔石で」

「了解、では最後、どんなのがいい？」

「戦闘の時に邪魔にならなきゃなんでもいいです」

「んじゃ指輪ね、ちよいまち」

バチバチバチバチ！！

> 雷光の指輪が出来ました<

ステータスを見る。

> 雷光の指輪<

耐久：120 / 120

スキル：雷無効・雷攻撃威力1.5倍

魔法：サンダーボルト

無効！？強すぎた！！

「アラン…」

「はい？」

「雷無効って普通ある？」

「半減ならありますけど…無効はありませんよ？」

「これ…雷光の指輪っていうんだが…スキルに無効がついちゃってるの」

「え？」

「ちよつと来て」

そっいつてアランをテントの外に連れ出す。

「指輪付けて」

「はい？」

アランは指輪を付ける…とそのとき！

「アランよけるなよー！！」



### 錬金しよう！3（後書き）

魔力を込め始めて30分…

「あー、後頼みます！」

「了解！」

…

…

アラン魔力切れ、30分もいけば切れるわな。

…

1時間…

魔力がまだきれない。

…

2時間…

魔力2分の1、それでもおおすぎだろうこの魔力。

…

4時間…魔力が底をつく。

あ、やばい立てねえ。くらくらしてめまいがして吐き気がする。

「立てない…アラン、魔力石出来てる？」

「石が緑色になっています、成功してます！」

「そうか、んじゃねむらしていただくよ、魔力のつかいすぎで気持ち悪いし」

「分かりました。お休み」

「おやすみ」

そういつて俺は意識を手放した。

## 材料稼ぎ

起床。予定より寝坊した二人は大急ぎでこれからどうするか決めた。  
「今日は鉱石とりにいくぞ！ほら！これ発掘用のピッケル！ほら、行くぞー！」

…そう、一方的に。

「秀一！ちよつと落ち着いも「バツハハイ！」ちよつと待ってくださーいー！」

アランは慌てすぎている秀一について行きざるをえなかった。

ビュウウウと常人じゃ決

して追い付けない速さで走る秀一、その100m先に息を切らし、秀一の5分の1以下のスピードで走るアラン。

「ヒイハアゼイゼイ！待ってくださいよー」

そんなアランの嘆きも悲しく、秀一は止まらない。しかし、アランはあること思い出した。

………

3分後…

そこには半径2mほどのクレーターの上に黒焦げになり、たおれている秀一とそれを足で蹴りまくっているアラン。どういう事かという、アランは秀一から「役に立つからもつとけ」とペガサスの靴を押し付けられていたことを思い出したのだ。そして、靴を履き、秀一に追い付き、天罰（雷）を下したのである。そして今、

秀一にO H A N A S H Iしている最中である。

「なんであんたはいつもいつもそっかしすぎるんですか！？」

「すみません！！すみません！！すみません！！」

…最早謝ることしかできない秀一であった。

10分後…

「ではいきましょう！」

「おお…」

秀一は少しやつれている様子。

「どこにいったこうとしたんですか？」

「この地帯の端。岩場が多いと思って…」

「でもそこならいくのに日がくれますよ？」

「だから…空からいくんだよ！」

「時間短縮にはなりますけど3時間以上掛かりますから羽が消えて落ちますよ？」

「だからこれも付けて！」

「これは…リュック？しかも紐付き」

「その紐は俺がいいよと言ったら引つ張れ。さもなくば命を落とす」

「わかりました…ではいきましょう！」

「おう！」

そういつて二人はバサツと飛び立った…

2時間後…

秀一が口を開く。

「よし、羽を取って自由落下開始！」

「ええええ！？死にますよ！」

「大丈夫、死なん、だから取れ！」

「分かりましたよ…」

羽がとられる。と同時に斜め下に落下が始まる。秀一も取り、落下を始める。

「ぎゃああああああ死ぬ！」

「大丈夫、こつからだから、リュックの紐を引けば？」

「そうします〜えい！」

クイツと紐が引かれる。すると、バサツと出てきたのはパラシュート。

「うわっ！落下がゆつくりになった！」

「だからいったろ？死なんて」



そこには秀一がみたこともない鉱石がいくつもあったのである。

「魔石ににているが…アランに聞か、アランー」

「はい」

「これなーに？」

「これらは上魔石というもので通常の魔石の2倍の威力？魔力を秘めていて、売り値も上等です」

「ほーうこれ使うと威力が2倍かー」

少し濃い色をした魔石なんだか…本当か？

「よし、じゃあ、試してみるか！」

まず、鉄で試す。



## 材料稼ぎ（後書き）

バチバチッポキッ！

失敗、鉄では耐えれないみたいだ。

ではつぎ、ミスリルでどうか。

バチバチバチ！

> 業火しゅつかのくわきの剣が出来ましたく

… 成功だ。

ミスリルならたえきった。これで錬金をしまくれる！！

「よし！じゃあ錬金はじめるか！」

「そうですね！はじめましょう！」

そういつて俺達は錬金を始めた…

…これから威力が桁違いの武器が出来ることを知らずに…

質問受付ます。突っ込み所満載だとおもうのでw

- - - - -

- - - - - 質問は活動報告より受け付けます。感想からは

受け付けません。ご了承下さい…

## 鉱石？ 鉱石？ 鉱石

さて、材料の整理整理。今回手に入れた石は、

炎獄石 × 2

水流石 × 1

電撃石 × 1

強風石 × 2

暗黒石 × 1

時空石 × 1

重力石 × 1

電魔石 × 3

火炎石 × 4

ライフストーン × 2

石 × 15

銅 × 5

銀 × 3

金 × 1

鉄 × 10

鉄の剣 × 20

木の弓 × 10

木の杖 × 5

回復薬 × 30

上回復薬 × 5

気休薬 × 10

気休薬上 × 5

小爆弾 × 60

バンダナ × 40

…後の方の物は血まみれの盗賊殿から拝借した。大量大量。  
「では始めます」

「どうぞ」

「今回は何かリクエストはありますか？」

「電気属性の弾と銃が欲しいですね」

「んでは小さい方がいい？大きいほうがいい？」

「大きい方で」

「分かった、少しまつとれよ」

：

「ここから一つ選べ！」

そういつて秀一が出したのは、石と鉄と銀と銅とミスリルと骨。

「うーん、じゃあ鉄かな？」

「鉄ね、んじゃ次…」

次に出したのは、電撃石と電魔石と麻痺袋。

「ここから2つ選んで」

「電撃石と電魔石で」

アランは迷う事なく即答した。

「よし！では10秒待てよ…」

秀一は選ばれた材料をかき集める。

バチバチバチ！

…そして錬金していく。ただし、今回は多いので時間がほんの少々掛かったが。

「出来た！」

「おおー、では見してください」

「はい、これがロームガンだ。そしてこつちが弾。銃は引き金を引いたまんまにすると連射できる。弾は当たったところから放電させる仕組み。なお、その内の一つは超放電弾で当たったところから一時間ほど放電し続ける代物だ、ほれ」

「ありがとうございます」

「いいの、では俺は…」

バチバチバチ！

> 獄炎の剣が出来ました<

火の剣でつと。んでステータス。

>ステータス<

獄炎の剣

切れ味：300/300

スキル

火属性攻撃威力アップ

燃え移り

魔法

ファイヤーウォール

オーバーヒート

テンファイヤーソード

ファイヤメテオ

---

強いのだったか…

さつきメテオ使ったら炎をまとった隕石が落ちて来て5m程のクレ  
ーターを作って消えた。

結果、最強。

「うー…」

今唸っているのはメテオに当たってぶっ飛ばされた、アラン君。ま  
あ、軽傷だな。

「がーっ」

「大丈夫かー」

「ぐーっ」

「おーい」

「zzzz…」

「呑気に寝とるー!!」

はい、どうやら大丈夫なようです。

まあ、まだやることあるし寝ないけど。

まずはタンマウォッチの強化だ。時空石でできるだろう。

>タンマウオツチ改が出来ました<

バチバチバチ！

> 暴風玉ができましたく

**ボオオオオオオオオ**

.....

とりあえず自分にヒールをかけまくる。

「魔力がもうやばい！」

バチバチバチバチバチバチバチバチ！！

>ライフバッチが出来ましたく

ゴクリゴクリ……

よし、最後実験だ。今持っている石を全て錬金するとどうなるか？

やる。言えは好奇心ってやつ？まあ、とりあえず今持っている石を

バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチバチ

バチ！！！！！！

いつもの10倍の時間をかけて出来上がったのは一つの水晶体。

> オールクリスタルが出来ました<

この水晶が秘めてる魔力がはんぱない。自分の5倍はある。んでステータス。

> ステータス<

オールクリスタル

能力

全威力？耐性アップ

代用

無破壊

それなりに強いのはつかだ。しかも壊れないとは…

まあ、魔力尽きたし紹介は明日で寝るか。

## 店

翌日：

朝日がまだ10度の所で秀一が起きた。

「あゝ寝た寝た、でも起きたには早過ぎ…！？あれは！」

秀一が見つけたもの…それは盗賊のバンダナである。

「これは空間に入れた物とは違う…もしましや！」

そういつて秀一はテントの隅から隅まで探した。

「無い、無い！」

「どうしたんですか？」

大きな声によりアラン起床。

「金がないあああああいいいいい！」

「ひっ」

大きな声によりアラン気絶。

「ああ！ちよつと、アラン、アラン…！」

：

「なる程、纏めると障壁を張り忘れて寝ている間に盗賊にはいられて金を取られた…」と

「すいません！すいません！すいません！！！」

「まあ、仕方ありませんが…食べる物がありませんよ？」

報酬金も宿屋に飛び、携帯食料もないからだ。

「うゝん」

「なんかいい手はありますか？」

「そう言えばさー、イスグラルって商業が盛んなんだよね？」

「はい、商業なら世界ナンバー1、2を争うほどです」

「俺の能力使って店開いちまえば？」

「材料は？」

「亜空間の中」

「なら金も…」

「そのまえに睡魔に襲われた」

「もう…なんとはいいいのか…」

「悪いー悪いーまあ、取りあえず帰ろう。それからだ」

「はい、では靴を「捕まって！」はい？」

「いいから！」

「？」

いわれた通り秀一を掴む。

「来た事のある所なら行ける！ワープ！」

「なる…」

シユン

アランの言葉が言い終わらない内にワープ。そのまま国へ直行。

そしてでて来たのはギルドの横。

「つと、ついたぞ、入ろう」

「そうですね」

…

「すみません、報酬を頂けないでしょうか」

「はい、では腕輪をご提示下さい」

「はい」

秀一は腕輪を手渡した。

「はい、では少々お待ち下さい…」

…

「お待ちせしました。報酬は銀貨90枚です」

「報酬が多いような気が…」

「シユウイチ様は盗賊を倒されましたね？」

「はい…ざっと100人、襲われたので返り討ちに」

「その盗賊がランクAAで手配されていた盗賊でして…」

「なる程わかりました」

「ではこれが報酬の銀貨90枚です。ご利用ありがとうございました」

アランの所に戻って…



「店作らないで置こうか」

「え？」

「盗賊倒したからって報酬が銀90枚に」

「ええ、店作りましょうよ」

「いやいや、意味が」

「作って作って作って作って作って作って……」

呪いみたいに駄々をこね始めた。正直うっさい。

今俺の選択肢は4つ。

1・なだめる

2・無視する

3・逃げる

4・折れる

…まず2は却下。うるさいだけ。1だな、いけそうにないが。

「おい、駄々こねるのやめろ、みつともない」

「作るというまで止めません！」

「やーめーろ」

「いーやーだ」

乗り気だったんだ、そんなに。

次、3、逃げる。レディ、

「ゴ―「逃がさねえよ？」痛っ」

足捕まれて顔面から見事に転倒。おーっと、鼻血が止まりません！

これは痛い！！

その後、なだめる、逃げるを繰り返したが、恥と痛みが降りかかり、

床と顔が血まみれになるばかり。しゃあない、最後の選択肢使うか。

「分かった！分かったから、足を掴むのと駄々こねるの止めろ！」

「わかりました！ではどこに店を…」

「立ち直るのが早すぎる！」

…

…

あれから店は宿の近くのライール広場ですることに決まった。建物

を持たないで…だが。どうせ違う国行くしもってたら金の無駄使いだしな。

んで、今は亜空間の中で作っている。気休薬を飲みながら。魔力が持たない、疲れる…

「100!こ、これでいいだろ…」

「いいですよ、ではいきましょうか」

「ちよつ、タンマ…」

「行きますよ!」

「あつ、ちよつ」

そのまま秀一は引きずられていった…

…

…

…

…さて、

「なんで、客がこないんだ!?!?!」

「知りませんよ、そんなこと」

人が来なくなつて20分…

店を始めて20分…

「なんで人が来ないんだつ!?!?!」

「だーから知りません!」

よし、こうなつたら…チビ神に…

（誰がチビ神ですか!?!）

（あ、もう出てきた。早いねー）

（だまらっしゃい!?!それで用件は!）

（まあまあ、用件は一つ、何故客がこない!?!）

（答えは一つ、殺人狂が暴れてるんだよ。ギルドの方に行つてみなおるよ、あつ、また殺した）

（そいつは殺したほうがいい?捕まえたほうがいい?無視した方がいい?）

（捕まえたほうがいい、あ!この広場に来るよ!）

（了解、そして最後相手の武器は？）

（大剣だ、健闘を祈る！）

通信が切れる、というか祈らんでいいし。

ドドドドドドドドドド！！

あ、来た。

## 店（後書き）

「死ね！死ね！死ね！死ね！！」

ありきたりな言葉を発しながら。

…うん、ざこそうだ。

「さっ、殺人鬼イイイイイイ！秀一さん！早く逃げまし…」  
カチッ

押したのはタンマウオッチ。これで狙いやすい的の出来上がり

「それでは…さようなら」

ズドン！

銃が鈍い音を立て火をふく。

…腕と足首に。

「一丁上がり！」

再度ボタンが押されると同時に…

「ギアアアアアアア！！」

殺人鬼の断末魔が上がる。

「後は縄で縛って…つとよし！これで向こうへ！」

「ちよつと！いつの間に！」

「無視！ゴー！」

「無視しないで！」

そんな嘆きは無視して殺人鬼を担いで走る秀一であった…

…

…

…

それから1分…

秀一が戻って来た。

…一人、客を連れて。

「秀一？そちらはお客さん？」

「当たり前…まあ、付いてきたんですがね、勝手にだけど」

「そちら…名前は？」

「あ、そうだ、名前ね、タシムっていうんだ、今回はちよいと興味があつたんできたんだ」

「タシムさんね、実はタシムさんが一番目の客なんで、名前をきかせて貰ったんです」

「そうかいそうかい、そりや光栄だ、んでなんかあんのかい？」

「ありません」

「ありやりや無いのかい…」

「まあ、割引ですかね」

「そうかいな、では剣をおくれ、後、

口調を戻してくれ、返って気持ち悪いよ」

「そうか、んじゃ改めて、何属性がいる？」

「そうそう、そうだねえ、水属性をくれ、なかなか見つからなくてね…」

「水…ね、んじゃ、豪水の剣だね、今ある一番強いのは」

「聞きなれない名前の剣だね…見せてよ」

「分かった、アラン、パス」

「了解！よつと」

「はい、どうぞ」

「おおー、見事な代物だねー、能力は分かるかい？」

「全て分かりますよ、まず水ダメージを半減、火ダメージ軽減、地ダメージ増加。」

そしてある程度の魔法なら一振りで無効化します。魔法は、ウォー  
ターアローレイン、激流破、です」

「細かくよく分かるねー、でも魔法はどちらも聞いた事がないよ、  
やって見ていいかい？」

「どうぞ、無永唱でできますので」

「本当？んじゃ」

タシムが剣を上突き出すと同時に無数の水の矢の雨がとても速い  
スピードで辺りに降り注ぐ。

魔法が終わるとタシムはへたりこんだ。

「どうしました？」

「っ、強過ぎるよ……」

「激流破の方が強いですよ？」

「…買ってから見よ、幾らだ？」

「金貨2枚です」

「意外と安いね…ほらよ」

「毎度！あ、あとこれかこれサービスね、選んで」

そういつて秀一が出したのはタンマウオッチとハンドガン。

「この銃…威力はどれくらい？」

「んじゃさっきの殺人鬼の手足の穴はこれで作ったといったらわかりますね？」

「わからんね」

「そうですか…では」

そういつて秀一はタシムに銃を向ける。

「ちよっ、なにするんだ！？」

「では、これを防げますか？」

「ちよつと秀一やめといたほうが」

「大丈夫、防げなかったら即刻回復魔法唱えるし」

「そうか…んじゃかかってきな！」

タシムが構える。

「それでは、一瞬ですよ？」

秀一は銃を構え…そして撃つ。

「ガッ…」

タシムは防げなかったようだ…

「ヒール、はい、勝ちました」

「なる程…威力が半端無いね…体に撃たれた時に撃たれたところに穴が開いたような気がしたんだか…」

「ああ、それ本当に穴開いたんですよ、血が残ってますし」

「そう言えばあの時計は？」

「あれは時間を止めることができるんだ、手をはなさないで」  
「？」

ウォッチのボタンが押される。

「あれ？あのアランって子跳んだまま空中で止まってる…」

「これで分かるでしょう時間が止まっていることが。因みに効果は30秒間」

そのとたん時間が動き出す。

「あ、落ちた」

「どうです？どちらにしましょうk「決めた」はい？」

「城に来てくれ」

「えっ？な、な、なんで？」

「私はこの国の王だ、だからこい」

「?????あっちよつと！」

そのまま秀一は城に引きずっていかれた…

アランを置いて。

「????ちよつ、秀一！置いてかないで〜!!」

結局アランも城に来る事になった…

店をほったらかしていたのでそこにあつたガラクタは全てとられたのは言うまでもなく…

国といっても難しくありませんよ。

城に（強制）招待された！？（前書き）

少しは並になった！？



## 城に（強制）招待された！？

あゝ秀一だ。引きずられてるから無性に背中がこすれて…痛い！ギヤアアアアア！石ガアアアアア…

秀一の嘆き悲しく、引きずられ続け、とうとう城に到着。通った道には秀一の血が滲んでいることはいうこともあるまい…

只今、血が止まらない背中に治癒魔法を掛けながら赤いカーペットがひかれた廊下を3人で歩いている所だ。…あー、またカーペットがさらに赤くなった…。このおてんば姫、おぼえとけよ。

「秀一…大丈夫…ですか？」

「これが大丈夫に見えるか？」

「見えませんね…」

見えないと分かっているなら話しかけるな。イラつく。

それから3分後…

背中全快、よし、イツツ？ショータイム！

「ててて、てててー、タンマウオッチー。カチツとな」

ボタンがおされる。同時に時間が止まり、秀一以外の物体の動きが止まった。

「さて、フルボッコにしましょうかね…」

それから3分ほど姫は殴られ続け、あとからバレないように治癒魔法を掛けて時間を動かす。…イライラ発散終了 100はやったしな。フフフ…

そのあと、そこには痛みでのたうち回るタシムと不気味に笑う秀一と啞然とするアランがいたという…

それから5分、気を取り直してタシム一行は歩き出す。

「おい、秀一…」

「はい？なんでしょう？」

「私を殴ったのあんたでしょう……」

「はて？なんのことやら？」

秀一は首を傾げる。

「しらばつくてんじゃねえよ！」

口調がよく変わるお嬢さんだ。取りあえず、眠ってもらつ「やろう」としている事がばれればだ」へグウー！

脇腹に飛び膝蹴りを頂戴してしまった。秀一がすっ飛ばされて当たった壁はたちまちクレーターが出来、崩れ落ちる。…秀一と共に。

「ウガアアアア！…こんの！」

「やられたりんか…ウォーターカッター！」

タシムの手から水の刃が連射される。そしてその刃は少しカーブし、秀一の元へ向かう。

「タンマ！」

秀一はそれをタンマウオッチをつかうことで避ける。そしてついでに殺人鬼と同じように手足に銃弾を打ち込む。そして時間が動き出す…

と同時にタシムが気絶する。取りあえずヒール使つて王のところに引きずつてく。千里眼で場所分かつてるし。あ、アランも。

王の間（自称）に着いた。と、同時に槍が脳天に貫通する。無論俺の…だが。

しかし俺の視界はブラックアウトしなかった。いわば変わり身の術をしたのである。鉄人形を使つたから相手の槍は粉々に、ボロいな。んで、本物の俺はというと…

「初めまして…王様さん？」

王様の背後に転移してた。てか、すきありすぎ。

「な、なんと…」

「礼儀がなつてないなあ、入ったら即死つてなあ、アラン？」

「いきなり脳天に槍が直撃しますので即死確定ですね、この国、どうやって成り立ってるんでしょうか？」

「同感」

「お、おまえたち、一体？」

「「ただの冒険者！」」

「ただの、か。あ、すまんすまん。わしはこの国の王、ドロス？バランダ。さっきは試してみてすまなかった」

「試す？」

「どれ程の強さや対応力をな、しかし想定以上の強さだな、これには少し驚いた。人形を代わりにするとは…」

「なぜ試した俺達を？」

「聞いてびっくりするな」

そのあと、王は衝撃の言葉を発した。

「退屈しのぎだ」

ヒョオオオオ…

どこかで北風が吹いた気がした。

「ガアアアア！なっ、何をする！？」

あつ、なんか無意識に王の首しめてた。あわててはなす。

「し、死ぬかと思った…」

「すいませんね、あ、あと今回の用件はたった1つでして…」

そういつて秀一はあばれているタシムを指さした。

「あちらのおてんば姫をお引きとり下さい」

そして帰って来る答えは…

「断固拒否する！」

「「エエエエエエ…」」

「ただし、わしに勝てたらいいぞ」

「えっと手加減なしで？」

「王と？」

「そうだ、わしに3回勝てたら引き取る、が、あんたらが3回負けたら、姫ごとでっけてもらおう」

「余裕だな…」

「余裕だけはあるんですね…」

「黙れ、誰からだ？」

「俺だ」

秀一が名乗り出る。

「ほう、ちなみに名をなんと申す？」

「尾崎秀一だ」

「では秀一、手加減なしだぞ」

「俺が手加減無しですとあなたなんか一瞬で殺せると思いますが？」

「ほう、大した自信だな。ではやってみるがいい」

「では始めます」

秀一は銃を取り出し、王の腹に向け撃った。

「ガアッ!？」

見事命中、当たった所から鮮血が舞った。

「ほれ、さようなら」

2発目を撃ち、当てると王は倒れた。普通の弾で急所はずしてたから生きてた。気絶してるが。

「アラン交代」

「はい」

城に（強制）招待された！？（後書き）

だが王は気絶している…

「よし、交代」

「？勝ったんですか？」

「お前のときも気絶してたからな、ま、いわゆる不戦勝とかいうやつ」

「なるほど」

また交代する…

王が起きない…

「よし、終了ー、おら、起きろ敗者」

そういつて秀一は王を蹴る×20

「っただだ、あれ？勝負は？」

王、起床。

「俺が撃った後気絶したから不戦勝だ俺達の」

「なるほどそうか…まてよ」

「なにか？」

「秀一殿が使ったのはその銃ですか？」

「そうですよ」

「普通の銃じゃありませんね？」

「自作ですよ、この銃は。さきに鉄で作った弾に魔法を刻んでそれを打ち出すことで威力を通常のおよそ20倍にした物です。まあ、もつとも、さっきのは魔法が刻まれていないただの弾ですが」

「なんと…そうだ、その銃、此方で買い取らせてもらえるか？」

「金額によります」

「一つ銀貨30枚で…」「よし、アランかえるぞ」「はい！」「ちよっ！ちよつとまてい！分かった！分かった！！金貨1枚でどうだ！！」「いいでしょう、しかし弾は別ですよ？」

「なんだとー！くっ！！いくらで売る！？」

「通常弾が100発につき銀貨10枚で魔弾それぞれ30発につき10枚。強魔弾はそれぞれ10発で10枚。爆破弾は5発で10枚。破裂弾が20発で10枚です。銃も合わせそれぞれの様に買いますか？」

正直こっちは大得をしている。

通常弾は鉄だけでいいので量産できるし、魔弾も魔石があれば100個以上は作れる。破裂弾は布（盗賊のバンダナ）で作っている。色々と損害がすくなくたりするのだ。

「通常を500発と魔弾を300発と強を100発。爆破と破裂を20発ずつ。銃は10丁くれ。商売上手め」

「会計は金貨10枚と銀貨310枚。魔弾は属性の希望は？」

「なんでもいい。ほれ、金だ」

「毎度、説明書も付けときますよ」

秀一は金を受け取る。袋がとてもでかく重い。

「これからもなんかあったらうつてくれ、言い値で買う」

「ありがとうございます。さて、ここでさよならといきたい所ですが：アラン、銃パス」

「よつと」

「よし、弾は：風でいいや、GO、TU、THE、HELL（地獄に行け）偵察者と暗殺者さん」

そう言うとき秀一は天井に弾を撃ちはじめた。と、その時、天井が壊れ、暗殺者や偵察者が次々落っこちてきてカーペットに赤く大きな染みを作った。

「な……」

「きずいてなかったんですか？最初から居ましたよ？」

「お前、ギルドランクは？」

「Aですよ？」

「AAAにしてやる、これをギルドに渡せばランクがAAAになる、その代わりこれからもたまに護衛を頼む」

「了解しました！ありがとうございます」

「ではまたな」

「あ、最後にマジックをみせましょう」

「どんなだ？」

「瞬間移動です」

「なに？」

「あなたの背後に一瞬で行きます」

「やれるも「終わりました」なに!？」

背後には秀一が。

「????????」

秀一とアランは混乱している王を尻目にその場から立ち去った。

只今ギルドに秀一達はいた。

「んじゃわたししてくるわ」

「行つてらっしゃーい」

…

今、手紙を渡した。

ギルドの人大騒ぎ。というかうるさい。

「うそだ」とか「王の名をつかうとは!」とか「モゲロ」とか。

…漸くこれが本物だと気付いたみたいだ。金がどっさり入った袋もつてくるもん。

「お待たせしました。こちら、金貨10まいとなります。そして秀

一さまはランクがAAAに昇格しました!おめでとう御座います!

次はSです頑張ってください。御利用ありがとうございました!」

一方的に話終了。アランとこに向かう。

「どうでしたか？」

「金貨も貰えた」

「何枚ですか？」

「10枚だ」

「なんて金額…」

「んまあ帰ろうぜ今日はちと疲れたし」

「そうですね、宿に戻りますか」  
そして、宿に戻り、就寝したときそれは起こった。いや、起こされた。



## チビ神による精神訓練

「ヤッホー、そしてお疲れ」

「何故お前が…」

「いや、君に言う事と伝える事と君を鍛えるために君の夢に入ってきたんだ」

「ちょっと位寝かしてくれ」

「却下させて貰う」

「…ぜってー殴ってやる」

「やれるもんなら？」

「…チツ、いうこととはなんだ？」

秀一が悪態をつきながら聞く。

「いうことはまずこの世界が3年したら壊れる可能性があるということ」

「え？」

「原因は毎度お馴染み魔王」

「でも普通に…無理なんだ」は？」

「今回の魔王はモンスターじゃないから」

「え、じゃあ誰が？」

「人間に乗り移ったんだよ、魔王の魂が」

「え…じゃあ誰か分からない…？」

「正解、でも2年半もしたら行動にでる為に表にでると思う」

「それを叩けばいいのか」

「そうだけど、魔力が君の100倍はあって体力は200倍はあるよ？」

「とりあえず2年半鍛えるか…」

「そうして。そして伝える事、1つ目、君の力が僕を超えちまいました」

「？」

「力付け過ぎちゃいました」

「最早人じゃなくなっちまったか」

「大当たり、後気付いた事ない？」

「なにが？」

「髪の毛が伸びないこと」

秀一は髪の毛を触る

「本当だが…それが？」

「やっぱね…君、実は創造神様に気にいられたんだよ」

「何故？」

「さあ？理解不能」

「…」

「まあまあ、それで、君に2つの能力を与えちゃったの」

「1つ目は分かった、不老不死だろう」

「当たり前、勸が鋭いね」

「あんたらはどこまで俺を人外にする？」

「次のほうが人をかけ離れているよ。神属性てさ」

「…最早呆れかえるばかりだわ」

「神に近づいちゃったからね、後これだけは言わせて」

「？」

「ドンマイ」

「それ、一番酷い励まし方」

「あらそう？」

「…」

「…」

「…タンマ」

ボタンがおされる。

「…！」

神の動きが止まる。

「畜生が、サウザンドキック」

神に1000発のキックが迫る。

「…？」

全て透き通る。

「ざ～んね～ん、それ幻覚」

「重ね重ね腹が立つ野郎だな」

「まあまあ、次はボコボコにするチャンスがある」

「？」

「君の力はまだまだ強くできるんだよ」

「それを鍛えるということか」

「相変わらず勸の鋭いお方で」

「んでどんな鍛え方だ？」

「神属性の魔法とか放ちまくって、僕に、僕も攻撃するけど」

「実践あるのみて奴か…いいだろう」

「ではスタート、僕はそちらにつといーよー」

「では…」

秀一の右手に黒く大きな鎌が浮かぶ。

「死神の鎌」

「いきなり神の派生！？んじゃあ…」

神は構え…

「クリアシャイン！」

閃光を放つ。

「ちっ！！」

思わず目をつぶる。

「すきあり！」

「っ！！」

背後からなぐられる。

「まだまだ！」

「調子に乗るな！」

秀一は即座に銃に武器をかえ神に向け火の弾を連射する。

「おっと！当たらないよ」

難なくかわされ、

「シャインソード！切断！」

光の剣で切り込まれる。

「バキュームシールド！吸い込め！」

秀一の作ったシールドに当たった光の剣は吸収され消える。

「こりゃ厄介、シールドブレイク」

衝撃波が飛ぶ。

「なっ！？」

ガキイイインと大きな音を立てシールドが削れる。

「電磁砲！」

削れた所に電気を纏った鉄球が飛ぶ。

「これで…やられてくれる訳ないか」

「これで死んでたら命がいくつあっても足りない」

「君はいくつももってるわけだが」

「悲しいことにな！」

飛び蹴りを放つ。

「まあ、そう嘆くな」

軽くかわされる。

「あと一つ伝える事」

炎の球が飛ぶ。

「なんだ？」

それを手ではじく。

「君の能力、スキルというもの」

「また、人外スペック？」

お互いが蹴ろうとし、足が交錯する。

「言えば特性とかいうもの、君は沢山あって任意で発動出来るけど、白い鉄拳が秀一に迫る。」

「例えば何が？」

それを踏み台にして大きく跳躍する。

「攻撃力1.5倍とか、思いつく限り何でも有り」

またそこに鉄拳が飛ぶ。

「んじゃ、回避力倍加」

秀一がそう唱えると秀一の体がオレンジに輝き、鉄拳を難なくかわした。

「いうんじゃなかった…」

鉄拳がさらに飛ぶ。

「撃墜率30%上昇。今更後悔しても遅い」

鉄拳が全て碎かれる。

「ちっ、ウォール&amp;ウォール、油断はするもんじゃねえな」  
2重の壁が現れる。

「甘い、ウイングスピア>貫通<」

その壁も風の角によって碎かれ、そのまま神の方へ飛ぶ。

「あらっ、なら、シールド「分裂、拡散」なに？」

風の角は分裂をし、100位の所でバラバラになる。

神と角の距離は3m、かわせる訳が無い

**チビ神による精神訓練（後書き）**

「ビッグバン！」

しかし、神は爆発を起こす事でそれらをはじく。  
…が。

「百烈拳、アータタタタタタタタタタタタタタタタ  
タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ  
」

100の拳が舞い、そして神をフルボッコにした。そして最後の一発で神はノックアウトした。

「ひ、卑怯な……」

「あ？俺はただ単にすきを突いたただけですか？」

「くっそ、負けを認める」

「因みにあれ弱気だし、もっと頑張りましょう、ですな」

「悔しいー！」

「イマンド」

「はらたつー!!」

「知るか、俺はもうかえりたいんだ帰せ」

「んじゃその穴に入れそうすれば肉体に戻る、最も、起きた状態でな」

「んじゃおさらばさせて頂くバーイ」

秀一が穴に入る。と、神もそこから消えた。

「…つと戻った」

気付いた時はいつも起きる時間位、8時ごろであつた。

「どうしたんですか？」

アランも起きていた。言うか、神と話せたりすること。

「いやー、チビ神と特訓してて」

「チビ……神？」

「まあ、俺をここに転生した張本人。一応仲間といえど仲間なのか

な」

「一応は酷い！」

チビ神が実体化して目の前に現れた。

「…どなたですか？」

「神で「チビ神です」お前がこたえんな。つか、チビ言つな」

「2人ともどういった関係で？」

「「ケンカ友達です」」

ハモツた。嬉しくないが。

「どういったご用件で？」

「そうだそうだ何故きた？」

「言えばアラン君にプレゼント。神と会話する魔法、ゴット…なんだったけ、「チャット、この記憶力0が」黙れ、んで、ゴットチャットね、これ唱えるといつでも僕と会話出来る。手を出して」

「はい」

アランが手を差し出す。

「ほいつ、といいよ」

神がアランの手の甲に魔法をかけるとそこに十字架の刻印が刻まれる。

「これでよし、それじゃ頑張つて」

「おい、ちよっ」

無視して神は消え去った。

「まっいいか」

「何が…「ゴットブリンガー」ぎゃあああああ！…！！」

秀一が唱えるとアランの頭上6m程から金の剣が降り注ぎ、なにかに刺さると消えた。アランはそれらをよけつつける。

「よし、分かった、デリート」

剣が一斉に消える。

「し、死ぬかと思いましたよ…」

「わりい、試したんだよ威力などを」

カードとかつくって使えるかどうかも。

結果は成功だ。これで新しく武器が作れる。

「まあ、クエストでも行こうぜ今日は」

「そうですねいきましようか」

只今ギルドに来た…が。

ギルド休館日なので今日は換金？クエスト受注？購入は行えません。  
ご了承下さい。

…とのこと。ギルドに休館日ってなあ…

「どうしよう?」

「王にかつてもらう物を錬金しまくります?」

「んじゃ気休薬やまほど買っていこう魔力が持たん」

「そうですね、そうしましよう」

「では、いつてみよー!」

「気楽な人だねー」

「黙らっしやい!いくぞ!!」

「はーい」

2人は道具屋で気休薬を50個買い、宿に戻った。

長く出来ない…

畜生。

伏線けしました。次の話が思い付かなかったので。



## アラン暴走

「うわあああ!!」

今しているのはカード型魔道具の実験だ。

あっ、黒い手が出てきた。アランつかんで…闇に引き込もうとしてる。よし、実験終了。それじゃ。

「マジックジャマー!」

カードをだし、唱えた瞬間手の動きが止まり、崩れ落ち消えた。

おお、強し。

「こりゃいい発見。この喜びを無くさないうちに寝よ」「何、寝ようとしてるの?」あ、アハ…」

後ろには周りにそれだけで一人殺せそうな殺気を放っているアランが機関銃を俺の頭に構えてた。あら、吃驚& a m p ; H E L P !  
「さて、ショータイムといきましょうか…」

「えーっと、どこの備兵…」

突っ込みを最後まで言わない内にトリガーが引かれる。

弾の属は風。当たれば体がぐちゃぐちゃにされる事は間違いないだろう。

…そう、当たればの事。

お忘れではあるまい。秀一は能力の端くれである能力、魔法を無永唱でつかうことが出来るということ…

これを応用する事が出来る事を秀一は知っていた。

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュヒュ

銃弾を全て秀一は最低限の動きでかわしていた。その体はうつすらと朱に輝いていた。

…秀一が応用したものそれはスキルである。スキルも魔法と発動条件はほぼ同じである。そこから秀一はスキルを無永唱で発動出来る事に気付いたのだった。不老不死で絶対に死にはしないが、血や肉が飛び散った後は飛び散った肉はそのままなのでアランに対したち

よつとした心使いである。

「さて、銃を置こうか、そしていくつかききたい事がある、とりあえず座ってくれ」

銃を掴み、上に向け指示する。

「は、はい…」

アランが座ると秀一も座る。

いや、へたりこんだ。

「まず1つめ、お前、人を殺した事があるな？」

コクリとそれを黙って頷き肯定する。

「では…何人殺した？」

「……ざつと、20人です。全て盗賊ですが」

「嘘だ。読心術でお前の心をよませて貰った所、数千人。殺したのは…何の罪の無い村人等の平民だ。そうだろ？元、殺人狂さん？」

少し間が空き、アランが口を開く。

「…よく、分かりましたね…そうだよ、俺は神からも見放された、追放者だよおお…！」

…やっぱりか。

スキルに狂人化なんてものがあるし、何よりも武器の使い方が手慣れ過ぎていた。それに、盗賊100人攻めてきた時の盗賊撃退した時大した動揺もなかったというところからすでに不信感を覚えていた。普通でも100人一瞬で殺したらどん引き、または気持ち悪くなったりするが、こいつは何もなかった。

後、今暴れた理由はこれまでの事を思い出した、または我慢できなく感情がはちきれたのだと考える。

後、気になるのはこいつが言った追放者という事。もしかして…

「お前、この世界の奴じゃないな？」

「…ああ、ただしお前の世界でもない。俺の国の事を話してやるよ、どんなのか分かりやすいしな」

そういつてアランは話して始めた…

…こいつが話した事を纏めると、

1 . 元の世界で住んでいた国はタハールという国だった。

2 . こいつには嫁と子がいた。

3 . しかし、前の世界は戦争が多く、ならず者も多く、自分が家族を引っ張っていかなければならなかった。

4 . ある日、起きた所、銃を突きつけられ、家族を連れ去られてしまった。

5 . そのあと銃で殴られ気絶。気づけばあの草原の所にいた。そこでモンスターとご対面。襲われる。

6 . だけど魔法の存在に気付いたため撃破やがてそのまま盗賊となり、人殺しもしていたが、ある人すきをつかれ、モンスターに襲撃される、そしてやがてこけて追い詰められる。

7 . そこに俺が来て、モンスターを撲滅する。少し演技をして。

8 . 気付けば魔法が使えた、が。威力が半端なので仲間になる。本当はどこかで裏切ろうとした。

9 . しかし、俺も異世界から来たと分かって、本当の事を隠し、下心を無くし、仲間になった。しかし実験等でストレスが限界に達したため暴走。そして今沈められた。

…こんな状態であったそう。だが俺と違った点が一つある。こいつは神と会った訳じゃなく、半ば強制的に転生させられた。補助も無しに。何故だ？

「おい、チビ、でてこい」

「呼び方を直せ、…とりま、こいつの転生原因を調べろというのでしよう？もうわかってるよ。対処法も」

「さっさとやってやれ、…まさかお前だったら、神殺しさせて貰う「やってみな。それで原因は死神の勘違い。気絶したときそいつの魂が少しのあいだ、浮かび上がったみたい。幽体離脱とかいう奴。それで間違えて死神が狩っちゃったんだそれで転生したんだ間違いにきがついたからね死神が」

「お前は関係がないと?」

「そう言えば管理してるんだろ?この世界を。なら分かったんじゃないのか!?」

アランも意見を神に言う

## アラン暴走（後書き）

「僕が目を離れた隙に入れられたんだ記憶の処理もせずに。あつ、死神がきたよ、弱いしボコボコにする？手伝ってやるし」

「捕獲せよ」

「気絶させて檻に入れろ」

「おわゝ、辛口になってる。」

「後者を採用する。よし、そゝらゝ」

何か悲鳴が聞こえたけどおいといて。

「対処法をいつてやれ。戻れるんだろ？」

「…実行出来るのは魔王が来る3年後、それも倒した後、2人ともその国に飛ばせる」

「条件はなんだ？」

「ていうか俺も！？」

「条件、神の花を食べろ。それだけ」

「神の花？」

「そう、魔王が1つ、そして…僕が一つもっている、黄金の小さな花」

「じゃあよこせ、この野郎」

「無理、2つ集まってやっと発動出来る物だから」

「そつえば、いつに戻るんだ？」

「気絶させられる10秒前、道具ももってけるし、一度行けば、君のワープで再度行けるおまけ付きだ」

「つまり、戻る事も出来るという事か、…俺にとっちゃあお得だな」

「俺も秀一が来るなら楽過ぎるな」

「あ、そうそう、君にお詫びとして不老の効果だけ付けておくよ。

不死があると色々いわれるだろう、あ、この世界だけだけど」

「十分だ。あ、死神パス、再度そっちへとばして消すから」

「おお、いいねえ、殺るか！」





## 判明したこと、新たな謎の術

只今考え中

これが今を表す言葉。

双方、首を捻っている状態だ。

「うむむ…何だろうかこの術」

「分からん、“技術吸収” つつてもな…吸収できんし」

「技術吸収―これが今秀一達の頭を捻らせているスキルの名だ。このスキルはチビ神に能力を付けて貰った時に付いたらしく、代わりに狂人化を消してステータスに上書きされてそのた。しかし、いくら唱えても発動しないため、使用方法を考え中となっているのだ。

「魔力が足りない？」

「いや、お前の魔力は満タンだ、あいつが今使えないスキルを付けると思っか？」

「なる程、そういう事か、あいつも一応神の端くれだし、それ位考えてるか」

「考えて無きや逆にやばいよ」

「…」

「…」

また沈黙が続く、しかしながら5分程で終わった。

「まさか唱えて使う物じゃなかったりして」

「それも十分に有り得るな、モンスターを倒したら発動なんて？」

「うー、じゃあ、殺って見よう 掴まれ」

「発音が何か可笑しいぞ、悪い意味の感じがするが、まあいい、掴まっただぞ」

「意味は合ってるだろう」

「どーでもいい、逝け」

「お前も違う！死ねつつうのか！」

「んー、わk」



アランの発言を成立させまいとワープ無永唱で発動する。

付いた先は2人のスタート地点となった草原だった。

「…不幸中の不幸だよな」

「…そうとしか言えまい」

着いた先に居たのは赤黒いゴツゴツとした体を持ち、秀一達の10倍程の大きさを合わせ持ち、口からは火の粉が混じった息を吐き出す竜がそびえ立って居た。しかも、距離は20mと離れてもいない。すかさず、秀一はこの竜のステータスを見る。

>ファイヤードラゴン亜種<

普通のファイヤードラゴンよりもさらに強力な攻撃力と炎をもつファイヤードラゴンの亜種。羽は発達しているが足は退化していて歩くのがやっと。なので空中にいかれるととても不利だが、一旦地面に叩き落とすと暫く隙が出来る。

属性

炎？龍

攻撃方法

足？爪？ブレス？羽？風圧

…何時もながら調べようとするものがパパッと出てくる。いい、能力だ。

「しかし、何故、亜種なんだろうか…」

「同感、まだ普通のみたことがねえよ」

「だが弱いみたいだぞ」

「何故？」

「知能が無いようだ…」

ドラゴンはさつきから雄叫び一つ挙げない。気付いていない証拠だ。しかも嫌いな地上に降りてしまっている以上警戒心等がないことが見て取れる。

「力が強くとも、有効に使う事ができないって事か」

「当たりだ、一度掴まれ」

「OK、いいぞ」

「ワープ」

秀一がワープした所、そこはドラゴンの背中。

「ここから、潰すということか？」

「ご察しの通り、殺っちゃえということです」

「では潰していいか？」

「どうぞ？ご自由に」

その返答が口からだされた瞬間ドラゴンの背中に大きな真つ赤な十字が出来る。ドラゴンは雄叫びを挙げようとするが秀一の頭への3発の通常弾によってそのまま絶命させられる。そして煮えたぎって熱い血液と皮を残し、消滅する。そして秀一はそれらを回収した。そして、アランのステータスを見てあら吃驚。

>アルム？アラン<

省略…

スキル

技術吸収

炎獄十字

省略…

省略をしてスキルだけ見たが1つ増えてしまっていた。確か、基本スキルは1人1つでは無かったか？

「アラン、炎獄十字と唱えてみて」

「？炎獄十字」

キーワードが唱えられるとアランの剣が赤く光り輝く。

「？これは？」

「木に振り下ろして」

「？？？」

アランが振り下ろして見ると木が十字に燃え上がり、木炭と化した。

「なる程…」

「????????? いったいなにが?????」

「技術吸収、これだよ。お前、敵に十字に斬ってダメージを与えたり? しかもファイアドラゴンに」

「そう…だが?」

「どうやらこのスキルは特定の敵を特定の方法で倒す、又はダメージを与えるとかと敵と方法に応じたスキルが貰えるというものみたいだ。さつきはファイアドラゴン亜種

に十字切りでダメージを与えたから炎獄十字のスキルが付いたんだ。上手く行けば無限にスキルが付くというのだな素晴らしいスキルじゃないかよ」

「とうとう、俺も人じゃ無くなったか…」

「いやいや、大丈夫。気にしなれば」

「…チッ」

「舌打ちって…まあいい、掴まれ」

「…」

アランは無言で掴まった。

これには流石に秀一も凹むようで。

「…死ね」

少々センチになりながら、アランに手の平を向け、炎を噴いた。

「?! オーバーキルー!!」

威力、通常魔術師の150倍

幸い双方の上半身が黒焦げになる程度で済んだそうです…

服を着替え再出発ワープ。

着いた先は宿の入口。

## 判明したこと、新たな謎の術（後書き）

直接部屋に行つて出ると不審におもわれるからだ。

取りあえず入つて部屋へ直行、ベットにダイブ！…といく前に色んな実験をすることにした。うん、危険だが色々だ。

「アラン、こつちカモン」

ちなみにあちらの世界でも英語はあるみたいで、簡単な英語なら通じる。

「なんだ？銃を2丁構えてあからさまに今から撃ちますよ〜という格好をした秀一さん？」

う〜ん、察知力抜群過ぎ、いや、俺の殺気の放ち過ぎか。

「そうそう、死ね」

秀一はそのまま、10発アランに打ち込むが難なくかわされ。

「どこ狙つてんだよ！」

そのまま、普通なら骨が2、3本折れても可笑しくないほどの蹴りを入れられる。

しかし、秀一はよけずにそのまま受け、吹っ飛び、壁にクレーターを作った。

「いつてえ〜」

…無傷だが。

「不老不死か。面倒だな〜」

「残念無念、また来年。ドンマイ」

そっいいながらも、アランのステータスを見る秀一。

>アラム？アラン<

略。

スキル

技術吸収

炎獄十字

## 脚力補正

しつこいと思うが略。

「思った通りだ…」

「何がだ」

「お前、足が軽くなった気がしないか？」

「…そう言えば前よりはとても軽く感じる」

「脚力補正つつうスキルが付いたんだ。多分、走るスピードとキック力が強くなってるんじゃないか？」

「なる程、だが、何故秀一を蹴って補正が付くんだ？」

「多分、俺の能力が関係してる。俺のスキルには無限の才能という万能スキルがある。能力は思い付く限りのスキルを行うことが出来るというもの。多分これはこの能力が能力が決まっている訳では無く、しかもダメージを与えただけだから、弱体化。だから、補正とかはランダムで決まるんだと思う。殺したら、無限の才能が手に入ったかもな」

「なら、お前を攻撃すると何のスキルがくるかわからんということか」

「いや、攻撃方法で足とかは分かる筈だ」

「なる程、んじゃ、俺にとつちや1石2鳥か！」

「何故？」

「鬱憤晴らしじゃあー！！」

アランが秀一に向け飛びかかる。

「ぐわー！！ちよつ、俺はどうでもいいのか！！」

「どーでもいい」

「酷い！！！！」

その後秀一が怒り、スキル>鬼人化<を使い、赤く染まった手でアランをひねりつぶし、気絶させたのは余談だ。  
次の話はクエにするつもり。

## 護衛クエスト？上（前書き）

上は受注？出発。中は道中？バトル。上は依頼主の悲劇と、三本に  
します。下はいわゆるバットエンドw

## 護衛クエスト？上

―翌日―

二人起床。正確に言えば、アランが10分前に起きて秀一を補正が掛かったキックで蹴飛ばし、起こした。勿論、ダメージを受けたのは壁だけだが。

「くっそ〜！！痛覚鈍いのか！」

「？おはよう」

「〜〜っ！！」

いや、アランもダメージを喰らったようだ。

そこらに骨が2、3本落ちている事から、折れた骨が足に突き刺さっていた物と見える。

秀一が気付いて治療。床が血で染まり、赤いカーペットとなったがアランの傷は塞がった。勿論床は水魔法と火魔法を駆使して、少々ふやけたり、焦げ焦げになっている所もあるが血は綺麗に取れた。そうしてこうして5分後。

今日1日何をするか決める小さな会議を始める。

「はい、ではまず午前から。どうしますか？」

「まず、城かな」

「ああ、そう言えばまたこい何ていわれたな」

「だからなんか売りに行こうと。金がねえし」

実際、食事？宿？服？錬金術の材料代などで30枚はあった金貨が今5枚。金欠状態なのである。

「OK、午前は城へ。なら午後は？」

「用意をしてギルドへ行こう」

「儲け？」

「いや、ストレス発散」

「…午後は普通に休んで…「おい」ひい！！」

小声で自分に合ったスケジュールを入れ、アランの意見を蹴ったの

で頭を掴まれ…

「意見きけやあああああ！！！！」

チユドオオオオオン！！

「ウギヤアアアアアアアア！！！！」

尋常じゃない速さで電気を纏ったキックを放たれ、秀一は処刑された…ように見え。

「…っていうのはうつそー！」

「なにっ…！ぐえええええ！！」

変わり身の術で防ぐ。勿論鉄製のため、アランの右足に尋常ではない強さの反動が襲う。

「ハイ、残念でした」

「GRRRRRRRRRAAAAAAAAAA！！」

アランさん悶絶中の為、治癒。

「ハア…ハア…何をする！！」

「あつまたムス力になった」

「ムス力？誰それっ！！いででで！！」

どうやらこいつはムス力を知らないみたいだ。

「あー、何でも無い。とりあえず城の天井裏へ羽を付けてワープするぞ」

「何故羽？」

「足音で近衛騎士にめったうちにされる」

「了解、ではいつてくれ」

「OK、ワープ」

緑に輝く羽を付けた秀一とアランが城の諸見の間の天井裏に転移する。

「おおーっと、足音セーフ！」

「おわっちょまっぐわっ！」

アランはその場に崩れ落ちる。

勿論、騎士が気付いてしまった。

「ん？天井裏に何かいるぞ？」



騎士がそついい、天井の端に剣を投げ刺し、高く跳躍し、剣を掴み、重力に任せ、引っ張り、天井を少し壊す。勿論ほんの少しだ。そしてそこから天井裏へ昇る。すると、1つの物体があった。しかし、人では無く、紙切れだった。勿論何か書いてあった。騎士は下に降りてそれを読む。

「えーっと、なになに、ざーんねーんでしたー、あなたみたいなぎこには捕まりませんよーだ。…馬鹿にしてんのか」

騎士は紙切れを破り、ポケットにしまう。

そこにまた、客人が現れる。秀一達だ。

秀一サイド

「よし、えーと王への諸見を願えるか？」

いま俺達は置き手紙をのこし城の外に出て、王への諸見を申し込みに来た所だ。今頃、あの近衛騎士は腹を立てているだろう。ククク…

「えーと、たしかに出来ますが…王への用件と面識があるかどうかをお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「ああ、行商だ。あと、王とは面識がある。秀一といえば普通に分かってくれるはずだ」

「分かりました、では、少々おまちください」

うーん、大丈夫だよな？数日しかたっていないのに忘れるはずないよな？

かれこれ5分…

案内人が来た。

「お待たせしました、此方になります」

どうやら思い過ぎだった様だ。良かった。

「了解しました」

取りあえず、近衛騎士のご機嫌と、王の状態を伺いに行くか…

諸見の間に着いた。

近衛騎士のご機嫌は…斜め

王は…黒い影に背後をとられ、今にも暗殺されそうな状態、ってコラー!!!王死ぬぞこれじゃ!!!

「影分身!障壁、巨大呪縛手裏剣!」

秀一はまず、分身をして、30人程になり、障壁を暗殺者以外に張って、全員一斉に影のように黒い大きな手裏剣を投げさした。

この手裏剣は当たると少しのダメージと共に相手の筋肉に染み込み固まらせ、動けなくする。

流石に素早い暗殺者でも29個の手裏剣はかわせず、殆ど喰らってしまう。そこに来たのはアラン。首を斬ってとどめをさす。

「スキルが入ってるよ」

「何?」

「弱点必中だつて、弱点に必ずあたるんじゃない?」

「了解、王をどうする?」

アランは気絶している王を指差す。

「起こす、悪夢による覚醒」

秀一は唱えた後、王に黒い球を飛ばした。その球は王に吸収された。しかしやがて、

## 護衛クエスト？上（後書き）

王の体が黒く鈍く光り、震え始めた。遂には悲鳴をあげはじめた。そして、

「ぐわああああー！」

…覚醒した。

「…あんた、すぎが多いよ」

刀を首に突きつけられ。

「なっ、なんだ？…なんだ秀一殿か」

「お前、なんで襲われるんだ？」

「知らん、理由は考え付かん」

「そうか、では、まず、用件なんだが…」

「おう、なにを売ってくれんだ？」

立ち直りは上手いが状況判断は苦手のようだ。この王は。

「では、まず、この品物を…」

結果、大儲け。

約、50枚の金貨がてにはいった。暗殺者の件の報酬がはいったから高いのだ、いい商売をした。

いま、ギルドまえ。

もうすでに食糧、水、テントは揃えてる。

後は受注だけだ。

入る、クエスト板に直行。

今は相談中だ。

「これは？寒導草の採取というクエ」

「それは報酬が安いし、氷山までいかなきゃなんない、却下」

「んじゃ、プロミネンスドラゴンの討伐は？」

「それは手頃だが…下手すると、肉を溶かされる」

「…これは？ラナルまでの護衛」

「いいんじゃない？」

「やつと認めたか…」

「では行こうか」

「…ああ」

少し不満が残る秀一ではあったが了承し、受注することにした。

「…はい、ラナルへの王の護衛ですね」

「ブー…！王！？聞いてねえよ…！」

「…受注は取り消さずお待ち下さいませ」

タッタッタツ…

「取り消させる…！」

「おいおい」

アランは秀一の肩に手を置いてこっぴった。

「ドンマイ」

「…一発なぐらせろ」

「無」

ボコッ

アランに有無を言わずアッパーを掛ける。しかしアランは判断がおくれまともに喰らってしまった。

「こんやろ！仕返してやる…！」

続いてアランが顔面に右ストレート。あらら、秀一の顔面が鼻血まみれに。

「ぐぎゃあ…！この…！」

続いてけつとばす。尚、この喧嘩は双方が倒れる迄続いた。

「えーっと、宜しいでしょうか？」

ガイドさんが戻る時にはそこらはもと通りに修復済み。2人ともだ。

「ああ、いいぞ」

「では、まず、腕輪を」

2人は腕輪を受け取る。

「そして、王なのですが…城迄きてほしいとの事です」

「了解、では行こうか」

「OK、ではあれを」

「ワイプ」

秀一達はその場から消え、城の前に転移する。

勿論、ガイドさん啞然。

「はれ？あの人達はどこいった？」

何があつたのか分かる者はギルド内には誰もいなかった。

## 護衛クエスト？中（前書き）

予定通り、道中の話。最後、バトルへ。

## 護衛クエスト？中

えーっと、持ち込まれた商談は、

「実はだがあの銃を騎士に使わせて見た所だな、軽々と使いこなし、しかも何時もより強くなっておったのだ。だからもしも、戦争が起きた時の兵士に持たせたいのだ。しかし兵士の半分の量の銃とまへの60倍程弾をよこしてくれんか？何しろ、兵士が30000程居るもんで…その代わり報酬は弾むぞ？」

という無茶苦茶な物だ。普通ならば。

30000だろ？この半分＝15000丁用意しろって！しかもこまへの60倍とも行けば、軽く15000を越しとる。何てむちゃくちゃな。出来るが。1日中薬飲んでやり続ければ5時間掛かるが。

ただし問題は材料。これはどうしようか…

（だいぶお困りのようで？）

勝手に人の思考に入り込んでくるなチビ神。

（あはは、ごめんごめん。とりあえずそのことについて助けてあげるから時間を止めて）

了解。

「タンマ」

タンマウオッチで秀一が時間を止める。

「よし、このことね。此方で製造できるよ」

流石は神。スケールが違う。

「君も出来るけど？製造というスキルもついてる…けど君は不慣れだしそもそも魔力が足りない。ランクを最後まで上げたら魔力が無限になるからその時試して。あ、あと話を戻して、まず王から注文を聞いて時間を止めて」

「了解、時間を動かす」

「…注文は？」

「銃は撃てれば何でも良い。弾は風と雷と通常を1000000ずつ、  
桁が違ううー！！」

「桁多い！！零が多い！！」

「魔力欠陥で倒れる！！殺す気かああ！！この王は！！  
と、とりあえず時間を止めて…」

「糞がアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

思い切り王の耳元で叫んだ。多分時間を動かした時に鼓膜が割れる  
であろう。この王は。

「うるさい！この王のいつてる事は実現可能だ」

H A ? N A N I I T T Y A T T E N N O K O N O H I T O

（は？何いつちゃってんのこの人）

「いやーその代わり、>作造の竜玉くを取って来て」

「サクゾウノリュウギョク？なにそれ？」

「ある龍が極稀にドロップするアイテムだ。この世界での売り値は  
一国を動かす程の値だ」

「うらせろ」

「却下。この世界にはまだ目撃情報がなくて売れない。しかもその  
龍もこの世界にはとても少ない奴で…一発でみつけて倒して。二匹  
倒したらやばいから」

「了解。名前は？」

「固まらないですよ。キング？トウ？キングドラゴン」

「…」

風の吹かない筈のこの場所で風が吹いた感じがした。

「…」

「キング？トウ？キングドラゴン。通称、金王龍。体中金？金？金  
でそのかわは高値で取引される。弱点は頭の王冠のような角で壊す  
と動きが鈍くなる。またほかの部位も高値で売れ…「はい！はい！  
いきまーす！！」

「全く、つりやすい。この上ないよ」



「んで？ んで？ どーじー？」

「自分で探せ。アイデアをあげると地形のサーチ」

「地形：か。なる程。おつ、出来た！」

秀一の頭に即座にこの国の地図が浮かび上がる。しかも誰がどこに居る、隠し通路等も分かるとても細かいものだ。勿論モンスターも分かる。

「そうそう、それで金王龍でこの世界を範囲検索してみたら？」

秀一がそうイメージするとあら吃驚。さつきまであつた人のマーカ―が全て消えて、火山の方に10程マーカ―が残っていたではないか。そしてその残ったマーカ―を調べると…

>金王龍<

持ち物

作造の竜玉

こんなに出了たけど。はい、当たりです。

「当たり前か。ならそのマーカーにワープして」

了解

秀一の姿はそこから消え、出てきた所は金色のドラゴンの前。

「……あつけない成功のしかただな。取りあえず死んでもらう」

秀一が言葉を発せれたのはそこまでだった。理由は時間が止まった世界に大きな雄叫びが拳がったためである。

その雄叫びが拳がった方を見ると動いている金王龍が。

何故かと考えようとするが爪を振りかぶつてくるため思考を中止させられる。そこに通信がきた。

「あーすまん、そいつの皮には効果殺しというスキルがついてて、時間を止めても動くから。んじゃ」

んじゃじゃねえええ！！助けろううう！！

…ふう。まず弱点をと。

「打ち抜きやあい！」

機関銃で打ち抜かれたのは角。折れた所で龍の動きがのろくなる。

「次は顔面！」

小さなナイフを数本投げて龍の顔をさらに醜くする。

「最後は…首！」

秀一は武器を太刀に持ち替え、首を刈りに行く。さながら処刑人のように。

しかし、ドラゴンはそれをすんなり避け、無防備の秀一に突進を食らわす。勿論秀一は避けるすべもなく喰らった。吹っ飛ばされていった秀一の着陸地点は溶岩の海。しかしそこに水をかけ、一時的に固まらず事によって溶岩に落下するのを防ぐ。そこか

護衛クエスト？中（後書き）

らドラゴンに向け大きく跳躍する。今度は羽を付けてだ。

「やはり甘い！」

今度は胸に太刀を刺しに行った。それを払おうと爪を振るつたが避けられ、刺される。しかしこれぐらいなら死にはしない。はずだが秀一の狙いはここからだつた。

「グオオオオ！？」

突然、ドラゴンが苦しみ、もがき始めたのだ。勿論秀一が太刀に毒を塗っていたためである。秀一はそんなドラゴンの首を刈った。ドラゴンの体と首が切り離されるとドラゴンは粒子となつて青紫に透き通つた玉と金の皮を残し、消えた。秀一はそれらを拾い、元の馬車に戻つた。しかし時間がうごきそうなのでもう一度時間を止める。「ご苦勞様。いまから君の亜空間に鉄とミスリルと風と雷魔石を送る。それで作つてくれ」

「了解」

「では失礼する」

「あい」

通信が切れた後亜空間に向かうと……

「ウギヤアアアア！」

鉾石がなだれ込んで来た。頭？足？顔面？腕、総数１００の傷を負う。一瞬で治癒する。そして、鉾石を整理して製造を始めた。鉾石をてにとり、鍊金。またてにとり鍊金。また鍊金。鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、時間動きそうなので再停止。また鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、鍊金、魔力が枯れそうなので薬がぶ飲み。また鍊金…を５時間繰り返し返した。見事に規定数を鍊金した秀一は外に出て、王との会話を初め直した。あくびをしながら。

「えーっと出来れば20日以内に……」「1日!」な?」

「もうある。いつでも国に送れる」

「なんだと！そんな量どこに…」「ここに」「ここに」「ぐわっ！！」「

そのとたん馬車を潰して拳銃と弾の山が現れる。王はそれに目を白黒させる。

「!?!?!!?!?!?!?!なんじゃなんじゃなんじゃ!!!!!!?!?」

「落ち着け。どうだ。ここで買取るか？」

「…買い取るがためさせる」

王は銃を一丁でにとり、6発、通常弾をリロードし、秀一に向ける。「貴様をはちの巣にしてな!!」

バ  
バ  
バ  
バ  
バ  
!  
!

秀一に弾を打ち込み、高らかに王は笑った。一瞬だけ。

「はあ……死んでくれ。王を操る者」

氣付けば王の後ろに黒い影が。勿論3枚にスライスされ、捨てられた。王は氣絶していたので起こして状況を話して貰った所、操られたのは取引すると言ったあとのようで、そのまま取引はしてあの袋をかつさうっていったよ俺は。これで金には当分困らんなくふふ…そんなこんなで今は…

「おい、そっち片付けて、王は後ろに！」

モンスターの大量と対局中です……

## 護衛クエスト？下

えーと、この事はたどって3分間。銃で潰れて馬車が壊滅したことに後から気付いた。

「……」

皆さんと一緒に口をあんぐりと開け啞然としましたよもう。仕方ないので歩きで王国

へ行く事になりました。そうして、1分経たない内にモンスターがたかって来て…

チュドーーーーーン！！

「そっちやばいつて！」

「あーあーごめんよ！」

ドーン！！

「ぐぐぐ…」

…今に至る。

「あー！！面倒くせー！！」

いわば、どこからとも無く出てくるしさつきから量が減らない。そりゃーじれったくなるものだ。

「風玉ああああ！！」

風玉。投げると破裂し、嵐ができて竜巻などで敵を吹っ飛ばす代物。秀一がつかったときはテントが竜巻で浮いた浮いた。

「……ガアアアアア！！……」

これにより40体程撃退。だが、モンスター達の行進は止まらない。いや、さらに酷くなった。どういう訳かというと…

「異臭！ゴホッ！ゲハッ！」

「は、鼻が曲がる！！」

「く、苦しい！」

モンスターが死んでも消えない。これが理由だ。いつもならば数秒で消えるのだが、今倒したモンスター達は全て死体残り、しかも、

腐敗が速く進み、異臭を放っているのだ。しかし何故だろうかというところで念話が届いた。チビから。

「あーやってんねー、実はそいつら此方のトラブルで起こった>誤現象くというものでね、済まないけど全て排除しといて！モンスターは出てこないようにしたから！んじゃっ！グッドラック！！」

…何故そんなに当事者が気楽にたかみの見物してんだ…

よし、あいつはまた天に召させるとして、まずはこいつら。

「たとえば半分撲滅されてるじゃん」

今の所の軍の状況は半壊状態。最早攻撃が出来ない、ただの肉の塊としかなっていない。あ、また、アランが頭を破裂さした。パーンで。

だが。行進は止まっていな。縄張りに入ってるからか？ていうか、仲間意識がないのか？まあいいやぶつ飛ばせば。

勿論、カードで。そうだなあ、衝撃を与えるか。

「カード鍊金。激流葬！隕石に葬り去られる！！」

効果はフィールド上のモンスターを全て墓地送りにする。

蒼い隕石で潰して。

ドゴオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!

唱えると30 m程の隕石がモンスターをプチプチ潰して行った。勿論クレーターを作って消えて行った。60 m、過去最高サイズの物を。そして他に残ったのは赤い無数の花びらと衝撃で気絶した王とモンスターの素材をひたすら剥ぎ取るアランと返り血をたっぷり受け、赤に染まった秀一だったとき。なにそれ、怖い。

さて、5分して…

「おーっ、やつと着いたー！」

「ご苦労であつた。まず報酬はわしから渡して置く。あと腕輪を触つて、魔力を通して見る」

いわれた通り通して見ると倒した敵の通算が現れたが、明らかに可笑しい所がある。

「あんなに倒したのに合計10体ー!?」

「ははは！実はそれは粒子を吸収してカウントするんだ。あのときは粒子がでなかったからノーカウント。無意味な戦いだっただけの事」

「ふっざけんなあー！！！！」

「ぐぎやあああああー！！！！」

勢い余って王、蹴飛ばしちゃいました てへっ

「銃も運んどいてくれよー！！」

捨てゼリフ残して王は空の遙か空へ飛び立って逝きました！

「はい、これ注文の品。金はもらってるから払わなくてもいいよ」

「一体誰が？」

「多分、今頃5ヶ所程骨折して運ばれてきただろう国王だ」

「ぴつたりです！何故そんな」

「ああ、あとつたえといて、腹いせに付き合っただけ有難うと」

「！わかりました」

「んじゃ、おい、アラン、次宿帰るぞ」

「了解」

このあと王の腑が煮えたぎって腹いせに兵士一人銃で撃ってしまったのは余談である。

「！さて、覚悟はできてるか？」

「右に同じく、覚悟はしているな？」

「何の？」

「問答無用！神罰、激流葬、サンダーボルト、ダストシュート、狭い通路、落とし穴、ブラックホール！！」

「シュートブレイク、ハイパーボイス！！」

神は雷にうたれまくり、隕石にうたれ、弱った所を蹴飛ばされ、塵がこびりついた細い穴に落とされ、音に苦しめながらも上に帰ろうとするが、ブラックホールにすいこまれて天に召した。

「おースッキリ」

「金もどっさり」

この喜びを心に秘め、今日は床についた。



護衛クエスト？下（後書き）

以上短い駄文でした。

## 休日

2人、起床。

勿論アランが起きて秀一が蹴つとばしたのだが。

勿論無傷な秀一は朝食の惣菜パンを食べながら、これからどうするか小さな会議を開いた。何時も一方的なものだが。

「えーっと今日どうしましょ？」

「休みよこせ」

「了解、では金は白銀貨5枚でいいか？」

「十分過ぎだ、それでいいが」

「では予定。個人個人で移動または行動してくれ。夕暮れに帰ってこれる距離なら自由。遅くなるなら次の日には一度帰ってくることでいいか？」

「いいぜ、あと、飯は？」

「勝手に食え、以上」

そう言い切ると秀一は宿からでてった。

「……？」

残されたのは白銀貨5枚と沈黙のみ。アランはその沈黙を崩し、白銀貨を持つて自らも宿を出た。

秀一サイド

「さて、何をしようかね」

今、俺が居るのはこの国の一番大きな市場。勿論4分の3が人ゴミで埋まって騒がしい状態だ。そこをかき分けて進むのはとても暑く、疲れる。

「ふう、やっとついた」

こうして辿りついたのは雑貨屋。もしかしたら元の世界に似た物があるかも知れないからだ。

「広いな、何故って、半分酒場になってんのか。道理で人が少ない

んだ」

とりあえず品物を見よう。酒場にはあとで行く事にしよう。禁句もいわれるだろうから。

「おおーいっぱいある。さて、なにがどれなのか」

今、目の前にあるのは粉々になっている白や黒の結晶みたいな物だ。しかも複数。どれかが塩でどれかが砂糖だとおもわれるが…はて、どれだろうか。

5つあるし…消去法使うか。味見出来るか知らんが。

「すいませーんこれ味見さしてください」

そこにいたのは店員であろう40代程の女性。容姿的にはどこにでもある平凡な容姿だ。絶対、断じて興味は持っていないことは先にいつておく。

「はい、味…見、ですか。どうぞご自由に」

ではそうさせて頂こう。まずは1つめの真っ白の奴。

「んー、甘いけど…渋い」

いわば渋柿である。外れだこれは。

次、2つめ。今度は黒や橙の結晶がまじってる。確か、塩にはこんなのがあった筈だがさあどうか。

「…しょっぱえー!!」

「それは、サン？ソルトという、海の水を乾かして作られた塩です。ただし手間が掛かるそうなので代金は高めです」

作り方が同じだ。これは嬉しい事だ。ただひとついえば味が少し濃いがまあ、きにすることはない。

「いくらだ？」

「はい、此方の器すりきりひとさじにつき銅貨3枚になります」

そういつてだされたのは前の世界の市販の塩の容器と同じ大きさのガラス容器。

俺にしたら安過ぎなんだが。

「3つ買おう」

「では、9枚頂きます」

「どうぞ」

「毎度ありがとうございます」

さて、次、砂糖だ砂糖。3番は、パッサパサのカツラカラで、味も苦くて、聞いた所によるとクレールフルという果実をすりおろした物を乾燥したものらしい。因みにクレールフルはグレープフルーツの色を緑にただけで味はグレープフルーツその物でした。勿論お買い上げした。

さて、話が反れた。次は4番。赤みがましってるが…

…ボオオオオオオオオオオ

「キヤアアアアアアアアア！」

かつ、かつ、かつりゃー……あああああいいいいいいいい……！！！！！！

衝撃で火を吐くほど辛かったぞこりゃ！！

「っ、えーつとそれはハバの実を粉末状にした物です…はい」

ハバの実〃ハバネロ、だろう。5番！5番！

「…味が無い」

「それはムーン？シュガー。銅貨2枚です。量はさっきとおなじです」

「5こくれ」

「毎度…店も直してくださいね」

「…あ」

気付けばそこらは火の海。ありやりやりや。修復で直して逃げるか。

「ワープ」

「にっ、逃げ…あれ？」

そこには何もかも元に戻った店があったとき。

今は店の前を歩き出したところだ。勿論塩とかは亜空間へやった。じゃまだし。次に来たのは石屋。いや、興味単位で。むっさオンボロな店舗だが興味は出る。入る。扉の鍵が閉まって中を見れば石なんて無くニタリとニヒルな笑いを見せてよってくるいかにも弱そう

なゴロツキが3人。畏か。丁度いい。

「おうおう、おちびちゃんが引つかかるとはねえ……」

カチン

「ぐふふ、ママの所へかえりたいかい？ベビー」

カチカチン

「持つてる金を全部おじさんにくれればお家迄送ってあげるよ。子羊ちゃん？」

カチカチカッチーン！

「…この屑の処理はちよいとらくすぎだな」

「おいおい、黙って聞いて置けば言いたいこといつてんじゃねえか糞がき」沸点が低い！」ギャポペエ！！」

盗賊の一人は頭に肘打ちされ絶句、そのまま頭から血を出し気絶。

「黙って置いて行けば「命を置いて逝って下さい」シェプウウ！！」

二人目は顔面を殴られ、腹に膝蹴りを入れ

## 休日（後書き）

られ抵抗できず、鼻血と命を置いて気絶。

「頼む！命だけは化けも「お断りさせて頂きます」ドグパア！！」

助走を付けて飛び蹴りを最後の心臓にくらわしはりたおし潰した。心臓のあった場所はドリルが通ったみたいにぽっかり穴が開いている。ご臨終確定なり。また、助走の時、一人を蹴り飛ばし、一人を踏み潰した。飛んだ方は壁にめり込んで、尋常じゃない程の血液がでてるから出血大量で臨死。放置。潰れたのは脳がぐちゃぐちゃ。

黙って手を合わせてご合掌。南無。

最後に石屋を凍らせてまたあるき始めました。あーお腹が減った。どっかくいに行こ。

アランサイド

時刻 秀一、宿出発1分後。

「さて、どこ行くかね」

全くどこ行こうかきまん。というかどういう所があるのかわからん。まあ、金はあるし適当にうるつこつ。

「まずはこれを崩そう。これじゃおおすぎて使えない」

白銀貨。これじゃおつりがでねえよな。

ビュッ！ズンガラガッシャーン！！

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「取ろうとするからだ。ざまあ」

盗賊が白銀貨を奪いに来るのは仕方ないか。これがあつたら5カ月は遊んで暮らせるし。きを付け…

「金がなーい！！」

あつそうだ。秀一に教えて貰った簡易探索術を使って見よう。まず、

てに付いた白銀の匂いを覚えて…

「クン、次は、これを頼りに匂いを辿れっていうことだが…あつ、分かるわこれ真っ直ぐ匂いが続いている。おおー使える」

とりあえず、あついた、ちよいと驚かすか。

「ちよつとそのナイスガイ」

「ナイスガイって俺のこへグウウウー!」

エレキボール。3流だなこいつ。とりあえず返して貰うよ。さて、ここは？

> HEY KAMON <

いかねーよ？風俗店だろ？高い声が響き過ぎてる。ばればれ。でも反対側は…

> 矛盾の館 <

ほこ？たてと書いて矛盾と書くが…はて、武具屋か？それともへんな嘘つきの店か？まあ、入れば分かるう。

「らっしやい、多分、迷ったろうがここは武具屋だほこたてのやかたと読むぞ、まあ、ゆっくりみていけ」

思い過ぎだったか。よかった、良かった。が。

「あの、此方の扉は？」

「ああ、そっちは酒場。情報屋がいるし、酒も上手いが…夜中営業だからあいてねえよ」

「了解しました」

なる程ねえーではまず武器を、つと。ここにあつて聞いた事のないのは、軽槍？

ああ、細くて軽い槍か。投げるんだらう。大体検討が付くわ。あとは、属性棒？

「ああ、そりゃ、属性魔力を込めるとそれに応じた色になってその属性攻撃が出来るこつちや。まあ、簡単に火なら熱く、電気なら痺れ、氷なら冷たい、水なら水滴が飛び散るみたいなしょーもないのしかないけどな!」





アランサイド

さてここがアーケードモールですか。店と人と…

「火が多いですねー」

火事ですか。では逃g

アラン、大火傷。宿に帰還すると即刻、秀一を蹴ったとき。んで火傷の痛みで悶絶& amp; 気絶。そのままベットへ、もちろん秀一は無傷で頭をポリポリ搔いてから自分も床に付いたと。最後は酷かったかな？次は迷宮への出発予定。

## 迷宮（前書き）

二回執筆中小説がバッテリー切れにより抹消されちゃったんでボツ口ボツかと。

## 迷宮

次の日。

秀一、起床。ボンバーヘヤーになってねてるアランに治癒魔法をかけて、置き手紙を置いて宿から出る。ペガサスの靴を履いてスキルの加速力30%アップと脚力増幅を付けてBダッシュ。最早音速越えてます。風が突き刺さる突き刺さる！

おかげで目的地に1分で行けた。そこは、

「酒と話をもらいに行くかね」

…酒場である。昨日の酒場だ。情報屋が少々気になってたから。酒は…少しね少し。

「うし！あいてるな」

「らっしやーい。酒ですか？情報ですか？」

気さくなマスターだ。こういうのは当たりだ。

「情報かな」

「なら、此方へ」

そうして案内されたところは二階。そこには尖りハットを頭に被った、中年男が何人もいた。適当に真ん中の所へ。

「らっしやい、どんな情報が欲しい？」

「ならー」

しまった。考えてなかった。まあいい、最近の話を聞こう。

「最近あつた事を3つ」

「よし、なら銀貨6枚だ」

勿論とられるか。定番だなー。

「はい」

「毎度！なら1つ。最近、下のランクでAAの100人の盗賊団を全員殺した新人がいるらしい」

あ、それ俺。有名になっちったか。言わないけど。

「二つ。迷宮が草原に現れた。今、色んな奴が探求しているだろう。」

モンスターやアイテムも落ちているらしい」

…迷宮。あるんだ。是非今日最下層へ行こう。無理か。でもいつてみよう。

「三つ。城に謎の行商人がきて国王相手に取引しているらしい。しかもこれは盗賊を潰したのと同一人物らしい」

俺、どうかしたのか。こんな目立ってしまつて。

「これで以上だ」

「…どうも」

「なんだよ、ぼっちゃん。顔色が優れないようだ」ぼっちゃんだあ？「じよじよじよーだんだつて！」

一気に殺気を込めたためそこにいた人全員がおじけついた。

「そうかそうか。本気だったらもうこの世に存在してなかったよ？命拾いしたねえ」

みんな殺気に怯えていたのでカクカクカクと震えるばかり。そこを秀一は通つてでていった。置き手紙を残して。

「ん、ん、ん？な、なに？>この部屋に居る人は仰向けに倒れたほうがいいよ？<は？まあそうして、どおおー！！」

伏せたところから上に矢が刺さつてきたではないか。勿論ほかの人にも。最後に刺さつたのは紙が付いていた。

「今度は？>読んで3秒置きに飛んでおけ<はー…」

さて、きたのは熱線。触れれば足が焦げて粉々になる。かすつてもだ。実際一人犠牲になった。痛みをかんじさせず一瞬で足をもぎ取つていった。

「？！あ、あ、あ、あ、足が…足が…足が消えた…」

最後には紙が飛んで来た。そこには、

「なになに、G O T U H E L L?」

「そりや噂の新人の言つた言葉じゃねえのか？確かいわれた人は全員処刑され…」

「もしかして…」

「御本人？」

そういつた瞬間、紙が降って来た。そこには、

>そうですよ。地獄で悔やめ。残り0.5秒で逝く電車にのりこめるから<

その手紙はそこにいた人には地獄の片道切符に見えただろう。何故ならそれは室内の人の処刑を意味するのだから…

「……そんなああ……」

一瞬にして同時に脳天に何か突き刺さるのがお互い、見えた。しかも自分に来たのが冷たかったことから氷の塊だと分かった所で皆の意識は途切れ、永遠に繋がる事は無くなった。そこにまた手紙が一枚。

>情報、ありがとさん。向こうでこっちの情報でも話しときなくと。

処刑したあと秀一はしたに行った。アランと置き手紙で待ち合わせておいたのだ。

「…もしかして殺っちゃった？」

「逝かした。情報聞いてから」

「何の情報だ？役に立つのだけ」

「草原に迷宮が誕生したそうだ」

「レッツゴー」

「OK」

秀一達はワープをして草原へ行った。

このあとマスターが階段で崩れ落ちて転げ落ちるのは違う話。

「ホワッツ？」

「オー」

そこにあるのは、階段。下へ行く物だろう。ただ、問題が…

「魔法式、多重結界錠とか、鬼畜ー！誰だ入ってんのー！」

鍵が掛かっている。そういうこと、でも秀一には関係ない。

「オールアンロック」

結界を全て解いた。約30の結界を。

「入るぞー」

「どうやって解いたー！？」

「てけとー」

「はあー…」

「いくぞ」

「へえ」

中は石みたいなものでできていて、壊れないように無破壊のスキルがついていた。色は青い。それはいい。それはいいが。

「階段が消えたー！！」

「帰れ、るか」

「あ、そうか、驚く事じゃあ…」

「ワーワーワーワーワーワーワーワーワーワー  
プワープワープワープワープワープワープワー  
プワープワープワープワープワープワープワー  
プワープワープワープワープワープワー×50」

「…無理だな」

## 迷宮（後書き）

「み、水をくれ…」

ワープ不可能。

「チビ！」

………

音信不通。

「脱出…不可能じゃね？」

「最下層まず行こう。帰れたりして」

「了解。行こう」

地下一階。

「無駄に広い！」

「食べ物、食べ物」

全然、暇、体力が減っていく。飯がくいたい。

結局そこにモンスターはでなかった。階段があったから降りる。

地下二階。

いまいるのは緑のゴブリン。戦った事はないが。10匹一緒にこられてぞつとしたが。

「HPすくね！」

「殴ると死ぬってザコだな」

こうして30秒で蹴りがついた。そこには透明な容器に入った黄色い液体があった。サーチしてみると、ゴブリンオイルという事がわかった。油はみたことがなかったので助かる。上手くいけば火を強く出来る。

そのあとはオーガがでたが瞬殺。アイテムが落ちなかったのは残念。

階段を降りる。

地下三階。

「えーっとここは？」

「とつても広い、が」

「その鉄の大きな鳥はなに？」

そこにいたのはあのサスのメタドリーその物だった。光が眩しい。恐らくここが最下層なのであろう。ちかすぎるが。

「ギャオオオオオオオオオオ！！！！」

…どこやこやいつてる場合ではないようだ。鳥、接近中。近寄るな、眩しい。

「鍊金、シモツチの副作用。発動、それから、ハイパーヒール！」

「何考えてる！」

「まあ、みとけ」

こいつは相手が回復するときに代わりにダメージを回復分だけ与える奴だ。だから。

「ガオオオオオオオオオオ！！！！！！」

大ダメージを与えられる。

「なっなにが？」

「アラン！あいつに回復魔法かけろ！」

「了解！スピル！」

「グガギャグウウウウウウ！！」

回復させる毎にダメージを与える。こりゃあ楽しいわ。あつ、死んだ。

そこには…ステンレスと黄金の目玉が落ちていた。回収。そこに、脱出口が現れる。上へ向く階段だ。

「帰るぞ、疲れた」

「了解」



登ると入る前の所になっていた。簡単だな。ここ。

「いくぞ」

「へーい」

そのまま、宿前に転移、といきたいが目玉をうりたいからギルドへ。んで行く、売る、さられる。結果。

ランクSへ昇格。金貨3枚ゲッツ。

はやーっ！Sって！まだほんのちよつとだよ？！きてから。

まあいいや。かえって糞して整理して鍊金して、寝よ。

就寝。

## 錬金をしよう4（前書き）

今度は4回抹消。全てバッテリー切れによるもの。これが5回目。  
言えば仲間が増える。

## 錬金をしよう4

起床の時間。

爆音が宿に響く。アランが雷をぶつ放したためだ。その先にあるのは秀一。状態、無傷。秀一、起床。アラン、口が開いたまま塞がない。今回は飛びもしなかったからだ。

「荒い、ぬるい、弱い、ざこい！」

「畜生！」

また、アラン、朝の攻撃失敗。

続いて朝の朝食のコツペパンらしき物と黄色い液体を食べながら、会議を始める。パンは固いが味はピリ辛で、スルメのような味が混じっている不思議な味で、液体はコーンスープかと思いきやレモンジュース。多分100%果実。舌が痺れる！ヒイヒイヒイ！！

3分もがいてやっと味が消えた。長持ちし過ぎだこの酸っぱ汁。取りあえず会議。中をすっ飛ばしたら結果は錬金。武器を作れのと。強要ですか？

ビリビリリイイ…

はい、強要ですねこれ。髪の毛が！！なにをするううう！！

ビッシャアアアアアアアア！！

「フギイヒイヒイ！！」

アランの骨が少し透けて見えた。電気ショックだ駄だ。悪魔？はい、さいですか。

ではアランをスケルトンにしたところで錬金を始める。まずは多くなつた材料を整理する。

材料（記入漏れ有り）

曲がった木の枝×37

真っ直ぐな木の枝×23

長い木の棒×12  
 短い木の棒×21  
 木の皮×45  
 木の蜜×56  
 木の葉×152（今後省略対象）  
 魔力×9247644644687568546…（今後省略確実）  
 竹の棒×4  
 鉄屑（小）×365  
 （大）×243  
 鉄棒×3  
 銅×43  
 銀×22  
 金×4  
 白銀×2  
 ただの石×563（以後省略対象）  
 クリアストーン×4（魔法を込めれる無属性の石）  
 火魔石×35  
 水魔石×23  
 （大）×1  
 風魔石×29  
 電魔石×19  
 地魔石×49  
 光魔石×36  
 闇魔石×26  
 魔力石×5  
 生命石×3  
 守護石×2  
 特攻石×3  
 オールクリスタル×2（新たに作った）  
 石炭×9575（省略対象）



なー。まあ、減らしていくか。

まずは疫病弾など。

「えっと、疫病と、潰れ易い銅を使ってれーんきん！」

「れーんギアアアアア」

光をまともに食らうからだアラン。とりあえず弾は…

「黒いなやはり」

黒いふつーの弾。まあ、なかでピチャピチャいつてるしはいってんだろつ。

さて、次は剣。この世界では銃が弱い。だから銃で誰かに勝つたりしたらさわがれかねん。

「今回は…能力付きにしたいし生命石と守護石と特攻石と金。あとは銀と闇魔石、ステンレスを使って…」

「ふーう治「錬金！」フギアアアアアアアアアア！目がああああ目がああああああああ！！！！あああ！！！」

ご愁傷様。さて、出来たらー

> 混動の守護剣が出来ました<

金〓光とカウントするのか。えーっと能力。

> 混動の守護剣<

能力

自己人格所持

持ち主の守備5%アップ

スキル

再生

効果無視

とんぼ返り

対象技術吸収>主<

人格所持…やばくないすか？

「いやいや、やばくは無いであろつ」

こいつも心読みよるう」

「主の技術をコピーしとるからな、当たり前じゃ、ついでに言えば記憶も。」

危険だ。壊そう。

「壊しても5秒で再生するぞ?」

参った。畜生。

「潔く負けを認める。主よ」

「何々?何で剣が喋ってん」「お前は黙っとけ(とれ)」「へい…」

剣に指図されたアランは部屋の隅でぢくまった。ご愁傷様。

さて、剣だが:「ノイズという名前があるのだが?」はあ、んまあ、女だろう。ステータス再確認。

>ノイズ<

所有者 尾崎秀一

属性 光 闇 火 風 時空 空間 回復

耐久力 852684585375824850¥8526845

85375824850

略

スキル

全補正

攻撃50%アップ

無永唱

偽造

錬金

回避率30%アップ

金運

激運





あれから3時間…

できたもの一覧

疫病弾×5

疫病爆弾×3

疫病の地玉×3

銀の剣×3

混動の守護剣×1（ノイズ）

特攻の短剣×10（以後、投げナイフ）

強盗ナイフ×5（以後、ブーメラン）

神の七つ道具1、雷空砲

こんだけ。最後のやつで1時間喰った。最後の七つ道具の1、雷空砲は砲台だけ。ただし、ほんの少しの魔力を込めるとたちまち増幅さして10000倍にし、打ち出す。玉要らずの今世界スタイル。勿論あたったら半年は痺れが取れないであろう、生きていれば。先に心臓麻痺か、心臓ショックであのよ行きだろう。南無。所有者はアラン、アラン以外が使うとすると異常状態になる。麻痺から、呪い、最悪精神寄生されて魔力と生命を根こそぎとられる。

疫病の地玉は投げて地面におとすか相手に直接当てるかで効果が違う。地面にやれば5日間半径3kmに無色透明無臭の疫病エリアが広がる。期間は3日、仲間には無効。相手が入ったら疫病に10分で発症し、3日寝込む、症状は胸の圧迫感。息がしにくくなり、時々体中で痛みが走る。直接やると対象以外に移ることはないが対象には不治の疫病が1秒で発症。不治といっても俺は治せるが。症状は精神破壊。手足や体の一部が消えたように感じたり、触感をうしなったり、体が焼けるように感じたり、凍てつくように感じたり、しまいには、幻覚を見る事もあるが、絶対に死なない。一生苦しみをあじあわせる疫病を発症させる。間違えば仲間にも当たる。

こんなもん。少ないやつちゃ。しかし…

「ノイズ、お前って、消滅することってあるか？」

再生があつても原型を留めないほどにされたら、やはり、剣だし。

「無いぞ」

まさかの無敵存在来たあああー！！

「儂も主がいつている神と同じように、一回天に召すが、1分もすれば全快状態で戻ってこれる、のだが、そのときに少々主の魔力を拝借することになるの」

「およそどれくらいか？」

「一億かの」

「ブツ！！」

アラン、吹き出した。無理もないか。桁が違うもの。

「いいよ、1秒で戻るはそんぐらい」

「ブフツ！！」

更に吹き出した。このとき、衝動でアランの頭をげんこつで殴って床にめりこまして気絶さしたのは悪くないと思う、多分。

というかすぐ起きた。

「そうか、なあに一秒で60分の1は回復出来る限りからの、大丈夫じゃ」

「ブフオオオ！？」

はあー。次はノイズに切り裂かれた。が、ライフバッチをもっているから死の一步手前で回復し始めた。執念深い生命力じゃ。あつ、目が開いた。治癒力高！

「OK、さて、アラン、どうする？」

「ふ…ギヤアアアアアアアアア！…！あちいよ！…！あちいよ！…！グギヤアアアアアアアアア！…！手足がああああああ！…！俺の手足はどこだよおおおお！！」

「疫病の地玉潰したな」

もがくアランの背中には紫の液体がべつとりと。治癒はしておいてやろう。この鈍感野郎に。

## 脱城姫探索隊

「起床」

ドッカーン！

「のわくっ！？？」

…部屋の爆発と共に。

「ちよっ…部屋爆破は流石に死ねるぞ」

「なんだ不老不死」

「仰る通りで…」

恒例となりかけているアランによる朝の秀一攻撃。元はスキル入手の為だったが今は…

「オラオラオラオラ！！」

「無駄無駄無駄無駄！！」

…アランのストレス発散と秀一の回避経験値入手という目的が入り、更に女将さんを困らせているようだ。2人は気づいていないようだが。

「しゃらくせい！」

「ぎょおー！！」

アランの右横腹に右フック命中。見事に内臓が潰れ、口から血を吐き散らし左側ソファもどきに御着席。そして肘置きに手が落ちる。

「ホールインワン！フォー！！！」

「ーーーー！」

声にならない声でアランが声を上げ、倒れた。ソファの座る所が血に染まる。

「うぎゃー！！治療！治療！！！」

？ ？ ？ ？ ？ ？

？ ？ ？ ？ ？

？ ？ ？ ？

？ ？ ？

?

?

?

朝をすつ飛ばし、昼。

「こんら、お前のうゝ……」

「まあまあまあ、治ったからいいんじゃないの」

「男の子なら我慢するの！」

「どこの女の子だよ！」

「やかましい!!」

「い！」

ほぼ忘れかけられていたノイズの一喝により、朝の会議及び昼の会議を実行。

「えー、先程「やかましい!!」と申されましたノイズ様。今日1日の行動プランをお申し出下さい」

「え？う…、そ、そうだな…」

（よっしゃ、さっきの喝のお返し決まったか！？）

(いや、こつゆう振りっつーのは女は上手いからな！)

実質、騙されるしな。被害経験あるから、ちつさな詐欺みたいなん  
で小遣い何回絞りとられた事か。

「秀一に錬金術10000000000000000発させるかの？」

…これやらされたら俺の身が精神的にやばい！！

「秀一」「よし、久し振りにギルドいくか！」ちょい「そうしよう」

「まゝズドゥドゥドゥドゥドゥ…」

「そん……おいてかんどくれー！！！」

ノイズは無視する事にしました　でも不吉、というより不潔……いや、間違ひ……あーっ……もうどーでもいい……不吉な予感が……ガッシャーン！

「ほらね」

「え？」

ギルドで鉄檻が落ちて俺らを捕まえるってどーよ！？これ？

「まあ、抜け出すのにはかからんか。アラン、目えとじとけー！」

「へえ！」

「錬金！鉄檻 拳銃＋通常弾！」

「くぐおっ」

今頃上ではムスカが何人もいるだろう。よし、リロード完了！

「フルバーストじゃ！喰らえー！」

今入っていた12発が一瞬にして、一斉に撃たれた。勿論狙い等無い。いくら強くともあたらなくては意味は無い。だからここに色々するのが秀一だ。

「タンマ、

痛覚耐性！ジャーンプッ！」

時間が止まった世界（以後停止世界）ではすべてが停止し、うごかなくなる。しかし、入った者はそれらを動かす事ができる。しかし、例外として、破壊しない限り動かせない例がある。その例の一つとして、一切、地面に触れていない物だ。落ちる事も飛ぶ事もない。ただし、魔法などの痛みを感じる物は触ると痛みを現実世界と同じように感じる。停止世界ではあくまでも物が止まるだけなのだ。

「うー、やはり、ピツと痛みはあるが…突き抜けないよりました」

秀一は何をしたのかというと、上に向けて撃った弾をよじ登っているのだ。ギルドの天井は30mくらいはあつて跳ぶには足りない。だからだ。はいとこ言えばロープ代わりだ。

「よしっ登りきった。えーっと？あれ？騎士？城の、…取りあえず拘束して事情聴取（尋問）しようか」

??????

?????

??

?

「…あれ？なんで我々は縄n…ギヤアアア」

「話をきかせてもらおうか」

首に火を纏った剣を突きつけたらかくかく頷いてくれた。いい子だ。

「脱城姫探索隊？」

「はい。姫が脱走しまして」

囚人扱いだな、姫。

「なっかなか見つかりませんので助っ人としてあなたをと」

「それで檻ですか、俺にはききませんよあんな物」

「それで、助けて貰えませんか？」

「報酬」

「金貨10枚で…」

「乗った〜!!」

取りあえず、金貨目当てとして付き合う事にした。

「くくく…嵌ったぞ」

そのとき、騎士の口元が上に上がってニヤリと笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2595w/>

---

異世界少年

2012年1月8日23時53分発行